

2024年度 千年村プロジェクト 伊那谷・松本盆地疾走調査報告書



千年村プロジェクト・メンバー

石川初	中谷礼仁
小林千尋	土居浩
金盛晋也	田熊隆樹
川井操	福島加津也
木下剛	林憲吾

(五十音順)

参加大学

慶應義塾大学環 環境情報学部 石川初研究室
滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 川井操研究室
信州大学 先鋭領域融合研究群 社会基盤研究所 学術研究院農学系 上原三知
千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース環境造園領域
都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室
東京大学生産技術研究所 林憲吾研究室
東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 福島加津也研究室
早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室
立正大学 奥村敦至
(五十音順)

2025年5月

千年村プロジェクトについて

〈千年村〉とは、千年を基準として、自然的社会的災害・変化を乗り越えて、生産と生活が存続してきた土地をさす。

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の蒐集、調査、公開、顕彰、交流のためのプラットフォームとして構想された。2011年に発生した東日本大震災後に、優れた生存立地を発見しその特性を見出す必要性を感じたことがその発端である。関東と関西にその研究拠点を持ち、環境・地域経営・交通・集落構造という4つの要素を重要視し、それらに関する諸分野の研究者・実務者によって運営され、2014～17年度文部科学省科学研究費助成事業「国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発」に採択された。様々な圧力を受け、変容を受け入れつつも、長らく存続してきた歴史を持つ地域には、生産性や防災性、経済的交流の基盤などが構築され、持続可能な土地固有のシステムが育まれてきたと考えられる。山際の集落、その眼下に広がる水田、集落を護る鎮守の森、他所へ通じる峠道、異国へ向かう海原。日本における地域の多くにはこうした共通する特徴が具備されている。しかし、これらの特徴は突出した文化財的指標というよりは、むしろ健全な国土を日常的にささえるものとして評価されるべきであろう。

千年村プロジェクトは、そのような地域に実際に赴き、環境・地域経営・交通・集落構造の各視点から、地域が存続してきた要因の分析を行っている。そしてその地域が良好な生存条件を保っていると確認できた場合、その地域を〈千年村〉として認証する。認証によって、当該地域の存続要因を理解していただくとともに、これからの千年に向けた存続可能な地域づくりの支援を行うことを目標としている。

凡例

[本書の構成]

1. この調査記録は2024年9月28日～29日にかけて行った伊那谷・松本盆地疾走調査の記録として、①調査前に事前に用意したものと②調査で獲得した諸情報を記す。具体的には①は第1,2,5,6章で、②は第3,4章である。

[執筆者名、図版出典、参考文献]

1. 執筆者名は一つの項目には付さず、巻末に一覧として明記する。
2. 図版出典、参考文献も同様に巻末に一覧として明記する。

[表記方法]

1. 引用文献は、著者名（発行年）の形式で本文中に記載し、詳細は巻末の参考文献リストに記載する。
2. 図表は、図1、表1のように通し番号を付ける。
3. 年号は西暦を基本とし、必要に応じて和暦を括弧書きで付記する。例：2023年（令和5年）
4. 史料の表記：史料名は『』で囲み、刊本や写本の別を明記する。
5. ヒアリングによる情報はヒアリングで得た情報であることを明記する。

目次

第1章 地図プロット編	4
1-0.はじめに	4
1-1.『和名類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見(2011) ²	4
1-2.同様の手法でその他資料を活用した千年村候補地の発見	4
1-2-1.アイヌ語地名による北海道・東北地域の千年村候補地の発見(2015～) ³	4
1-2-2.『おもろさうし』による沖縄地域の千年村候補地の発見(2015) ⁵	5
1-2-3.荘園地研究を活用した古代・中世における歴史的生存環境の発見(2020) ⁶	6
1-2-4.国外における千年村候補地の発見(2018～)	6
1-3.千年村プロジェクトの今後の展望	7
第2章 調査および報告書の目的	8
2-1.調査の目的	8
2-2.報告書の位置づけ	8
2-3.調査の基本概要	9
第3章 2024年度伊那谷・松本盆地疾走調査 各村の報告	12
第4章 2024年度伊那谷・松本盆地疾走調査 考察	35
福智郷 千年村認証に向けてのメモ(木下)	35
千年村をバイクで疾走する。そこからわかること。(中谷)	46
歴史の交差点 2024年度長野県中部疾走調査(福島)	48
町の記憶を残す千年村(林)	51
分割された小野神社と矢彦神社／藤島亥治郎の復元民家(川井)	54
疾走調査を「小盆地宇宙」論からふりかえる(土居)	56
伊那谷・松本盆地疾走調査報告 -クラのある暮らし、棟向きの変化-(田熊)	60
穂高矢原地区の倉について(小林)	64
第5章 付記	67
5-1 謝辞	68
5-2.巻末資料	69

第1章 地図プロット編

1-0.はじめに

千年村プロジェクトは、全国の〈千年村〉の収集、調査、公開、認証、交流のためのプラットフォームとして構想され 2011 年当初から今に至るまで運動体として日々アップデートし続けている。千年村プロジェクトの研究プロセスとして定義される「みつける」「まなぶ」「つづける」「たたえる」は学術的な研究から誰でも参加可能なワークショップレベルのものまで、幅広く人々を巻き込む運動となっている。本報告書では本年度の活動実績を踏まえ、千年村プロジェクトの研究プロセスである「みつける」「まなぶ」「つづける」「たたえる」から、特に基盤的な研究の部分である「みつけるの」分野における研究の発展を整理したい¹。これについては、主に早稲田大学中谷研究室にて行ってきた各種歴史文献にもとづく比定地の地図プロット作業が主となるが紹介させていただく。

1-1.『和名類聚抄』記載地名の現在地比定による千年村候補地の発見(2011)²

千年村候補地をひろく全国から発見するために、平安期辞書『和名類聚抄』に記載される古代地名と、それらを現在地へと比定した既往研究の成果を用い、地理的にプロットした。それらを千年村候補地とした。主要参考文献は『角川日本地名大辞典』である。ここには『和名類聚抄』記載地名の現在地比定に関する先行研究がまとめられている。その比定精度は、以下の7つに分類される。

1. 単一の大字に比定される
2. 複数の大字に比定される
3. 市域に比定される
4. 河川流域などの複数の市域にまたがる範囲に比定される
5. 比定に関する説が異なる
6. 比定地は未詳とされる
7. 比定地に関する記述がない

本プロジェクトでは、以上のうち現在の行政区画・大字領域に比定されるものを抽出しプロットしている。その数は『和名類聚抄』記載郷名 4020 個のうち 1994 箇所である。

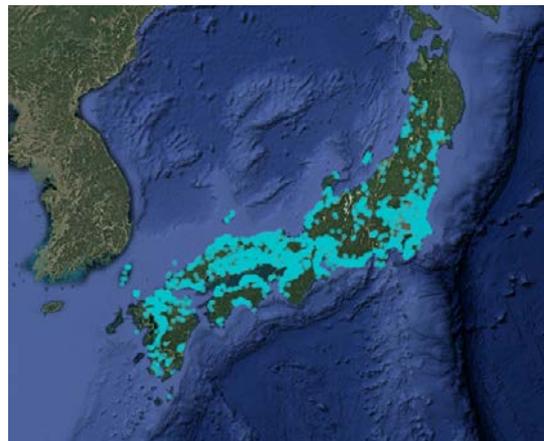


図 1. 『和名類聚抄』による千年村候補地プロット
(千年村 HP より引用)

1-2.同様の手法でその他資料を活用した千年村候補地の発見

1-2-1.アイヌ語地名による北海道・東北地域の千年村候補地の発見(2015～)³

広い範囲で集落の遍在を確認できる『和名類聚抄』であるが、制作時に朝廷から実効支配されていなかった北海道、青森県、沖

縄県にはプロットがなされておらず、その地域において歴史的生存環境を発見することが困難であった。これを受け、そうした地域に対しても他資料を活用したプロットを行うことで、それぞれの資料特性を反映した千年村候補地を増やし、調査対象地域の拡張を行う研究が出てきた。

北海道については「アイヌ語地名」を用いて千年村候補地の発見を試みた。13~17世紀頃まで栄えた北海道のアイヌ民族は、生活に利用する場に地理的および環境的特質に沿った名前をつけていた。現北海道の地名の多くがそれらアイヌ語を基にしている。それらを比定した既往研究である「アイヌ語地名リスト」の中にある比定地を比定精度で分類、記載地名 1032 個のうち和名類聚抄の場合と同一の条件で 620 箇所を抽出し千年村候補地とした。



図 2 「アイヌ語地名リスト」による千年村候補地プロット

(鈴木明世『北海道 1300 年間における空間構成の変化と連続性—アイヌ語地名の空間プロットをもとに—』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室 2015 年度卒業論文より引用)

また、これらのアイヌ語地名は北海道だけでなく東北地方においても広く分布されることが知られている。東野友紀は『和名類聚抄』では畿内と陸続きにも関わらず東北地方にプロットが落ちていないことに着目し、それらの歴史的原因の追究と、プロットの

作成により東北地方の歴史的生存環境を評価する方法を研究した⁴。東野の論文はプロットの補填のみならず、『アイヌ語プロット』『和名類聚抄』によるプロットの妥当性の検討やそれらへの批判を厳密に行った研究であり、また考察部分の、実地調査に基づいて作成された流域断面図を用いた連続性の視覚化は本研究の分析部分においても踏襲する項目の一つである。

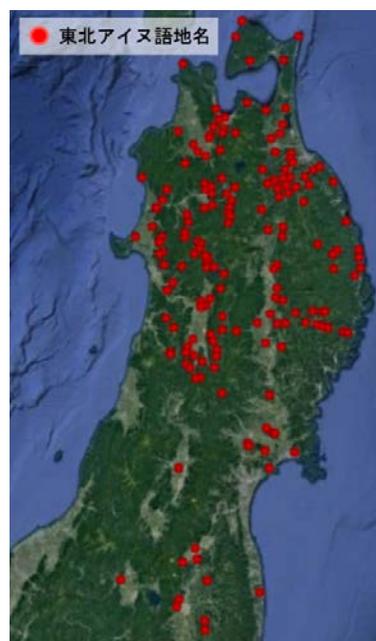


図 3 「東北アイヌ語地名リスト」による千年村候補地プロット

(東野友紀『和名類聚抄』批判に基づく東北における長期持続集落の発見方法—阿仁川流域における集落分析を一例に—』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室 2021 年度修士論文より引用)

1-2-2. 『おもろさうし』による沖縄地域の千年村候補地の発見(2015)⁵

北海道と同様に『和名類聚抄』に記載がない沖縄については、古琉球時代の歌謡集『おもろさうし』で地名を確認することができる。それらを現在地比定した既往研究が『角川日本地名大辞典』に記載されているため、記載地名 228 個のうち和名類聚抄の場合と同

じ条件で 98 箇所のプロットを作成した。



図 3『おもしろさうし』による千年村候補地プロット
(千年村 HP より引用)

1-2-3. 荘園地研究を活用した古代・中世における歴史的生存環境の発見(2020)⁶

また候補地の発見は『和名類聚抄』を中心に、同様の時代から対象となる地域を拡充するという共時的な視点を持った研究以外にも、異なる時代の資料を扱った通時的な研究も存在する。荘園プロットは国立歴史民俗博物館「日本荘園データベース」を底本とし、古代から特に中世を中心として全国的に広く普及した荘園を比定精度ごとに分類、適当な対象として 5306 荘園を抽出しプロットした。このことにより、従来行っていた古代郷に加え、古代から中世にかけての土地の開発の展開過程の傾向を明らかにする研究土壌が生まれつつある。



図 4「日本荘園データベース」による荘園地プロット
(千年村 HP より引用)

1-2-4. 国外における千年村候補地の発見(2018~)

一方で国内にとどまらず、より包括的な枠組みの中から日本の歴史的生存環境の位置付けを捉えようとする試みもある。2018 年から 2019 年にかけて行われた中国雲南少数民族村落調査⁷ではプロットという手法での調査ではないが、中国において千年という単位の持つ中長期的な視点、一方で百年単位の直近の歴史的出来事を見る視点の双方から複眼的に確認するような、千年村の研究手法を展開した。コロナウイルスの流行を受けてこの研究は半ば中止となってしまったが、計二回の調査で描かれた集落の姿は、プレートの上で環境からの一次的制約を受けながらも生きながらえる姿であり、それは日本の千年村と根底を同じくするものであった。



図 5 雲南調査での学生ポスターセッション
(2018/11/12 甲斐撮影)

また、2015 年に早稲田大学中谷礼仁研究室所属の犬伏が初めて国外の千年村候補地発見のための研究を行った⁸。対象地域は現韓国であり、使用した史料は『三国史記』『地理志』である。記載地名を 2024 年度から韓国調査チームで犬伏の論文を精査、韓国における千年村調査を展開した。日本古代に

持ち込まれた生産技術や、国家形成のための統治システムは朝鮮と大きな繋がりがあ
る。中国や韓国を調査対象とすることは、東
アジアという大きな枠組みの中で日本の集
落の特性を構造的に捉えるきっかけになる
はずである。今年度から始まった韓国千年
村調査は現在科研費に申請中であり、今後
の継続研究が計画されている。

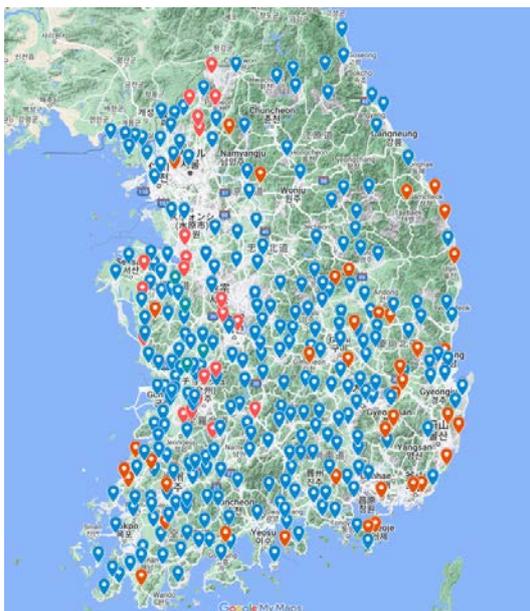


図 6『三国史記』『地理志』による
朝鮮古代地名プロット

(犬伏の論文(注7参考)をもとに、早稲田大学中谷礼仁
研究室作成)

1-3.千年村プロジェクトの今後の展望

これまで千年村の基礎研究に沿って紹介を
行った。以降はプロジェクト全体のプロッ
トを用いた活動について述べてみたい。
本年度は千年村プロジェクトのホームペー
ジにハザードマップのレイヤーが追加さ
れ、現代における環境アセスメントが千年
村の立地と直接的にどう関係しているかを
一覧することができるようになった⁸。

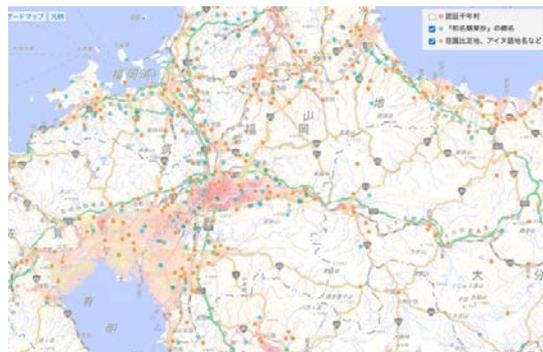


図 7 千年村 HP より、プロットに洪水浸水想定地域を
重ねる(佐賀県)

また、千年村を「みつける」以外の「まな
ぶ」「つづける」「たたえる」にも関わる包
括的な活動フレームの展開として、「登録
千年村」を発足予定である⁹。地域史にか
かわる客観的事実と千年村評価基準による
判断を必要としている点は認証千年村と同
じであるが、申請者が地域に深く関係して
いることが必要だった限定を外し、誰でも
申請可能となった。



図 8 登録千年村申請用 google form
こうした新しい千年村プロジェクトのフレ
ームワークが提示・更新され続けること
で、「みつける」の後続にあたる「まな
ぶ」「つづける」「たたえる」領域の活動が
活発になることを期待する。

1.本報告書で調査対象に選定した地域は、千年村研究で2011年に検討された『和名類聚抄』を活用した千年村プロットと2020年の「荘園データベース」を活用した荘園プロットによって発見された地域の両方が含まれている。この両プロットについての概要を述べるため、本章では過去の報告書による文言を参照しながら千年村研究の歴史を整理し、説明することを試みたい。

2.中谷礼仁・庄子幸佑・鈴木明世「〈千年村〉研究その1：平安期文献『和名類聚抄』の記載郷名の比定地研究を用いた〈千年村〉候補地の抽出方法と立地特性に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第87巻791号 pp.221-231,2022年

3.鈴木明世『北海道1300年間における空間構成の変化と連続性—アイヌ語地名の空間プロットをもとに—』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室2015年度卒業論文

4.(東野友紀『和名類聚抄』批判に基づく東北における長期持続集落の発見方法—阿仁川流域における集落分析を一例に—』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室2021年度修士論文

5.木村真拓『古琉球と現代沖縄の空間的連続性をもつ集落地域に関する研究—『おもろさうし』による古地名の現在地比定を通して—』早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室2015年度卒業論文

6.中谷礼仁「『日本荘園データベース』の比定地をもとにした国内荘園地プロットの紹介と古代郷プロットとの比較分析の一端—千年村研究その11—」、『2021年度大会学術講演梗概集』、p527-528、2021年参照。特に本報告書で対象地域として選定されている「荘園プロット」について細かく見るため、その作成プロセスについて以下に本文からの引用を載せる。

まず、大字単位で荘園の位置を地図に示すという目標のため

に、「日本荘園データベース」に記載された情報のうち比定情報を抽出し、プロットの種類を以下のように分類した。

00：参考市町村+明治村字名が現在の住所に一致

01：参考市町村名を変更（合併による名称変更）

02：参考市町村名を変更（隣接する市町村）

03：明治村字名を一部変更（同音異字等）

04：明治村字名を一部変更（上下/東西南北/町村宿等）

05：明治村字名を一部変更（合併等による固有名詞付与）

06：地名辞典で大字レベルに比定

10：施設名等に明治村字名が残る

20：明治村字名・大字レベルで比定されていない

21：比定の説が複数ある

22：比定が推測の域を出ない

本プロジェクトでは、上記の分類のうち00~10、現在の大字（または大字単位以下の地域施設名）に関連付けられるものを大字単位での比定可能地とし、プロットを行っている。

7.蔡意境「RE-EXAMINATION OF VILLAGE VALUE: AN INNOVATIVE APPLICATION OF JAPAN'S MILLENNIUM VILLAGE METHODOLOGY IN CHINA」早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室2019年度修士論文

8.犬伏順一「韓半島における古代地名の現在地比定に関する基礎的研究—『三国史記』および『韓国古地名辞典』の精査を通して—」早稲田大学建築史系中谷礼仁研究室2015年度修士論文

9.千年村プロジェクト「千年村をみつける」<http://mille-vill.org/>

10.千年村プロジェクト「登録千年村」<http://mille-vill.org/>

第2章 調査および報告書の目的

2-1.調査の目的

本報告書は2024年10月28日から29日にかけて行われた伊那谷・松本盆地疾走調査において得られた知見および考察を報告することを目的としている。

2-2.報告書の位置づけ

本研究は今後の集落調査の存続のための評価手法の開発を目的としている。千年を超えて生産と生活が持続していると考えられる地域を千年村候補地とし、持続要因に関する調査を行う。そしてその地域が良好な生存条件を保っていることを

確認した場合には、その地域を〈千年村〉として認証する。〈千年村〉は日本の国土の土地利用と景観の基層をなしてきたと考えられ、これらの正当な評価手法が必要である。

そのために以下の3つの段階を達成していく。

(1)平安期文献『和名類聚抄』をはじめとする諸史料に記載された比定地によりプロットした全国の千年村候補地のデータベースの作成および公開

(2)千年村候補地を「環境」「地域経営」「交通」「集落構造」の視点から調査

し、それらの関係性および持続要因を解明

(3)各地域の存続に関する普遍的要因と歴史的要因を元にした〈千年村〉の認証基準と存続手法の開発

上記の実現のためには、より多くの千年村候補地を網羅的に調査することが必要であり、本報告書で報告する伊那谷・松本盆地疾走調査はそのひとつとして位置づけられる。

2-3.調査の基本概要

本調査の概要については以下の通り。

【調査日程】2024年9月28日(土)～29日(日) (1泊2日)

【参加者】

■千年村プロジェクト・メンバー(五十音順)

石川初(慶應義塾大学 環環境情報学部)

川井操(滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科)

木下剛(千葉大学大学院 園芸学研究科)

土居浩(ものづくり大学 建設学科)

林憲吾(東京大学 生産技術研究所)

福島加津也(東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科)

中谷礼仁(早稲田大学 創造理工学部 建築学科)

田熊隆樹

金盛晋也

小林千尋

■協力者

上原三知(信州大学 先鋭領域融合研究群 社会基盤研究所 学術研究院農学系)

■学生

慶應義塾大学(羽賀、原田、茂木、佐藤、飛川)

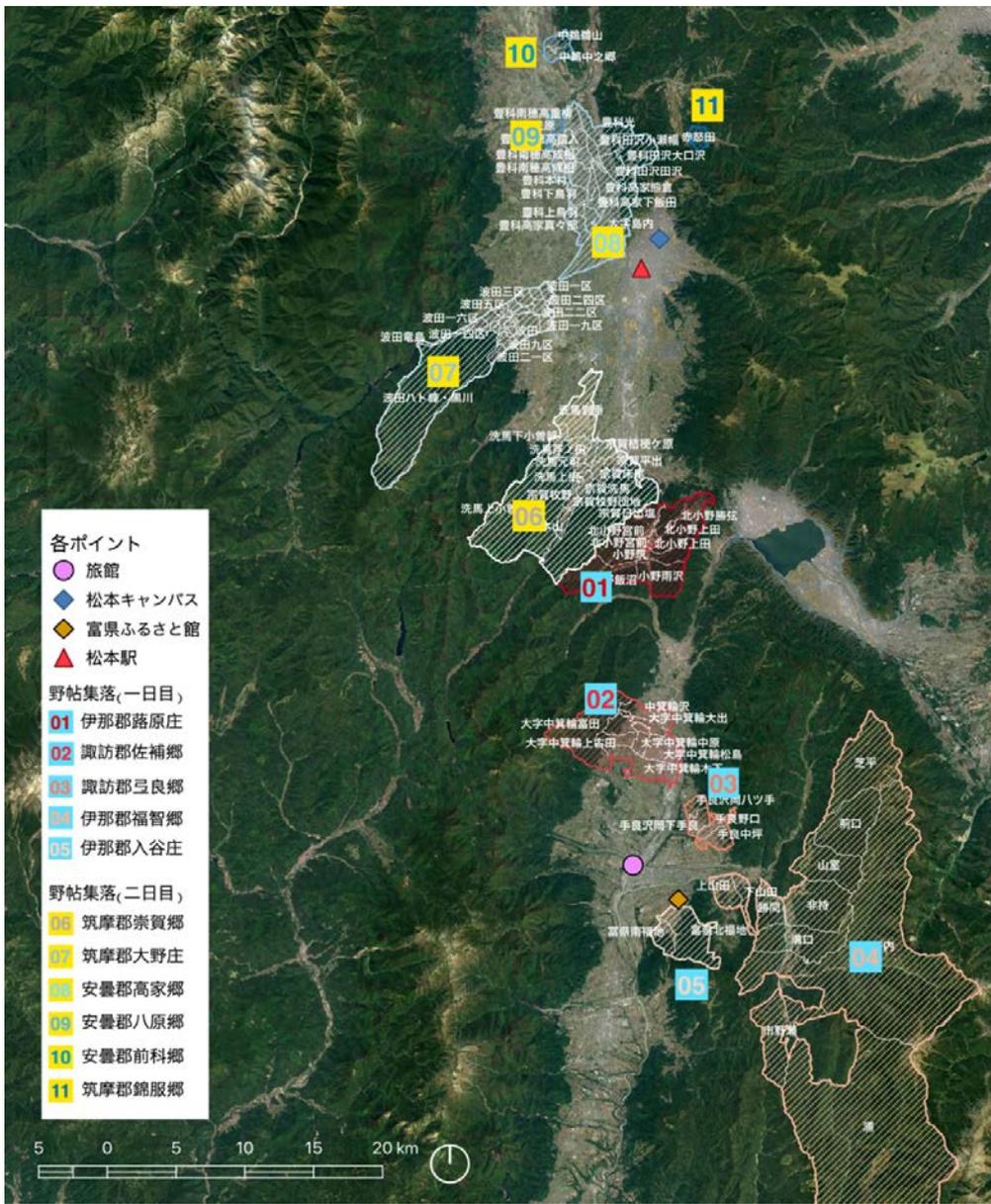
滋賀県立大学(上紺屋、小幡、小林、西岡、折野、渡邊)

千葉大学(酒田、寺村、苗、猪野尾、菰田、齊藤、望月)

早稲田大学(呉、碓井、北澤、小谷、ソニア、安藤)

東京都市大学(五十嵐、大里、鈴木、倉田、

(市町村：南信地方伊那市・箕輪町・辰野



杉浦、谷々、大橋、池田、葛)
 東京大学(張、中村)
 立正大学(奥村)

町、中信地方塩尻市・松本市・安曇野市・池田町)
 詳細は第三章 各村報告にて後述する。

【調査地域】伊那盆地北部、松本盆地南部

図 9 2024 年度伊那谷・松本盆地疾走調査 該当集落

【調査行程】2024年9月28日(土)～29日(日)(1泊2日)

表1 2024年度伊那谷・松本盆地疾走調査 予定スケジュール

	日程 Schedule	詳細 Details
9/28(土)		
8:00~10:37	新幹線移動(新宿発、松本駅着)	あずさ5号(南小谷行)
10:40	松本駅アルプスロターミナル集合	※学生代表・メインドライバーは 10:25ニッポンレンタカー松本駅アルプスロ営業所 (JR松本駅アルプスロより徒歩 3分)集合、レンタカー手続き。
10:40~10:55	班合流	学生代表・メインドライバーは手続き終了後車をアルプスロターミナルに移動、班合流。事前に連絡担当が班をまとめておき、車がターミナルに来たら順次乗り込み調査開始。
10:55~15:15	集落調査	01~03、05のうち2つの集落を実見。
15:15~16:05	04伊那郡福智郷調査	富県ふるさと館前に集合 50分の調査
16:05~16:10	会場集合、設営	5分
16:10~17:10	ポスターセッション準備	1時間の準備
17:10~18:10	ポスターセッション	各班10分*4+福智郷20分
18:10~18:30	ポスターセッションまとめ・現地の方との軽い交流	まとめ10分+交流10分
18:30~18:45	撤収作業	15分
18:45	撤収、旅館へ移動	ふるさと館より車で15分ほど
19:00	旅館着	旅館あいや 旅館花鳥屋 ホテル青木
~20:00	夕食	
	自由時間	
9/29(日)		
8:30	宿出発	
8:30~15:00	疾走調査	06~11のうち3つの集落を実見。
15:00~15:10	会場集合、設営	松本キャンパスに集合
15:10~16:10	ポスターセッション準備	1時間の準備
16:10~17:10	ポスターセッション	各班10分*6
17:10~17:20	ポスターセッションまとめ	10分
17:20~17:40	1日目2日目振り返り	20分(大人メンバーひと言11名*1分、集合写真撮影)
17:40~17:55	撤収作業	15分
17:55~18:10	撤収、レンタカー屋へ移動	
18:10~18:20	返却(流れ解散)	ニッポンレンタカー松本駅アルプスロ営業所 (松本キャンパスから車で15分ほど)
18:40~21:17	新幹線移動(松本駅、新宿着)	あずさ54号(新宿行)

第3章 2024年度伊那谷・松本盆地疾走調査 各村の報告

第3章では2024年度伊那谷・松本盆地疾走調査において
悉皆的に調査を行った11村の概略を以下の5つの視点から示す。

- 1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報
- 2) 実見によって得られた客観的情報(環境・地域経営・交通・集落構造等)
- 3) 考察
- 4) 集落を象徴する風景と名前
- 5) 断面ダイアグラム

【対象集落】

- 1 伊那郡小野牧/長野県辰野町小野・塩尻市北小野
- 2 諏訪郡佐補郷/長野県箕輪町大字中箕輪沢・大出・八乙女・下古田・上古田・中原・松島・木下・富田
- 3 諏訪郡互良郷/長野県伊那市手良中坪・手良野口・手良沢岡
- 4 伊那郡福智郷/伊那市富県北福地・南福地・桜井・貝沼・北新・上新山
- 5 伊那郡入谷庄/長野県伊那市黒小河内・芝平・宇良・茨口・市ノ瀬・溝口・非持・山室・勝間・山田
- 6 筑摩郡崇賀郷/長野県塩尻市宗賀・洗馬
- 7 筑摩郡大野庄/長野県松本市波田
- 8 安曇郡高家郷/長野県豊科町・松本市島内
- 9 安曇郡八原郷/長野県安曇野市穂高高原
- 10 安曇郡前科郷/長野県池田町中鶴
- 11 筑摩郡錦服郷/長野県松本市赤怒田

01 信濃国伊那郡小野牧(荘園)/長野県辰野町小野・塩尻市北小野 しなののくにいなぐんおのみき ながのけんたつのまちおの しおじりしきたおの
担当:北澤宏太郎(早稲田大学)



▲図1 小野牧小野神社周辺の小字



▲図2 小野牧と各街道の関係図(筆者作成)



▲図3 小野神社(9.28 北澤撮影)



▲図4 矢彦神社(9.28 北澤撮影)

1).文献・地図等の情報から得られる客観的情報

「憑(たのめ)の里」とも呼ばれる信濃国伊那郡小野地域は、縄文時代から中世にかけての遺跡が見つかり、東山道が通る交通の要地であった。『枕草子』や『夫木抄』にも記録がある。中世には武田信玄の時代に領地争いが起き、宿場や関所も設けられた。近世以降も製糸業が栄え、昭和36年には辰野町の一部となった。

(『新版 角川日本地名大辞典』より)

信濃国伊那郡に位置する牧(現在の長野県辰野町小野から塩尻市北小野)で、かつて諏訪郡に属していたことがあり、『延喜式』には記載がないが、『吾妻鏡』文治二年(1186年)の記録に左馬寮領として登場する。宮処牧から分かれたとされるが、後に諏訪下社領となった。地域には「牧の内」「馬の神」など、牧場に関連する地名が多く残り、かつての牧場としての歴史が伺える。(『国史辞典』より)

2).実見によって得られた客観的情報

小野神社を中心に実見した。

・環境

近くの下諏訪、塩尻といった人工密集地から距離があり、周囲を山々に囲まれた孤立した地域で、東に向かって緩やかに傾斜している。

・交通

木曾と諏訪を結ぶ交通の要衝として発足当初の中山道(当時は中仙道)の一宿を担った(小野宿)、その際小野は東西に中仙道、南北に三州街道が通る交差点であった(中山道はその後、北部の塩尻宿を通る迂回ルートへと変更された)。

・地域経営

宗教面では諏訪神社と強い関連があったと見られる。また、三州街道沿いで矢彦神社の参道付近にはかつての宿場町としての立派な構えを持つ家が並んでいる。宿場町としての機能を果たす際には、宿ごとに交代で当番を行っていたと地域住民が教えてくれた。

この地域は交通の要衝地としての歴史を感じられる。特に、小野神社の社叢はその最たる部分で、一つの社叢の中に二つの神社が併存している。元々矢彦神社だけだったものに、小野神社が後発でできたもので、矢彦神社は江戸中後期に隆盛した豊かな絵様・彫物表現を持っている。一方小野神社は、神道的な雰囲気と神名造と大社造を合わせた復古式特徴を持つ。また小野神社には戦争に関する記念碑が多く、明治維新後の富国強兵や、神道再興に関する時代的特徴も垣間見れる。小野神社は1672年に消失後、松本藩によって本殿と勅使殿のみが再建され、拝殿は1915年に再建と時期がずれていることも要因の一つである。またヒアリング調査からは、この地域が御柱祭と強い結びつきがあることがわかった。

3). 考察

矢彦神社と小野神社は拝殿の形態こそ違うものの、伽藍配置とスケールは酷似している。これに大胆な予測をするならば、元々矢彦神社の式年遷宮として建てられた建物が、現在の小野神社の前身になったと推測する。これに関して、矢彦神社の由緒や長野県の歴史を紹介するサイト*によれば、白鳳2年(674)に朝廷の勅使がこの地に下向した際、勅使殿が設けられ新宮を造営、さらに現在の例祭である正遷宮祭と御柱祭が7年毎に行われるようになったと記されている。また装飾が豪華な矢彦神社拝殿等が建てられた江戸中後期には、小野神社周辺に桑畑が広がっていたと考えられており、豪華な造りは養蚕産業によってもたらされた豊かさと関係していると推測できる。

*長野県の歴史 <https://www.nagareki.com/tatuno/yahiko.html>



02 諏訪郡佐補郷／長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪下古田

担当：中村莉緒（東京大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

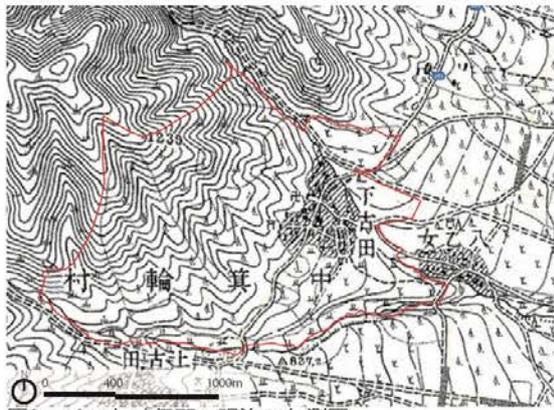


図2 1911年「伊那」明治44年測図

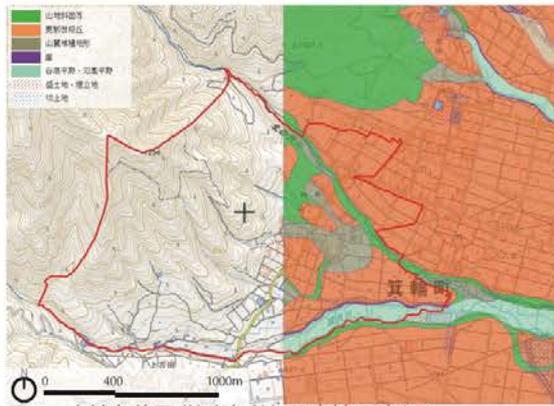


図3 土地条件図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 下古田のため池(2024.9.27 筆者撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

現在の箕輪町大字中箕輪沢を中心とした地域に比定される郷で、下古田には東山道深沢駅が存在したと考えられている。[1]東には南北を流れる天竜川が、中央部には東西を流れる深沢川・帯無川が流れている。これによって段丘が大部分を占める土地条件ができ、古くからの集落のほとんどが段丘面に形成されてきた。松島には三州街道の松島宿があったため、三州街道と諏訪道、木曾への脇道との分岐点として交通の要衝であった。

2) 実見によって得られた客観的情報

下古田という扇頂の集落を中心に調査した。

・環境

山裾の斜面地と山麓の平坦な地形を持つ。山裾には明治十二年に完成した([2]pp.474-476)ため池が残存していた。(図4)ため池周辺は斜面が多く涼やかな気候であるため、多くはそば畑や果樹園として利用されていたが、部分的に別荘風の趣向を凝らした住宅が建っていた。山麓は田んぼとして利用されていた。山裾の白山神社付近に住む住民によると、ガーデニングで土を掘り起こす際に縄文土器や矢じりが頻繁に出土するという。(図5)

・集落構造

山側から順に山地、別荘+畑、古い集落、田んぼとわかりやすいゾーニングがされており、斜面地と平地を活かした合理的な土地利用をベースとした集落構造が確認できた。(図6)また、古い集落は山麓堆積地形の微高地に形成されていた。

・建築

古い集落では土蔵の積極的な利活用が行われていた。(図7)原形をとどめているものはなく、上屋の増築か上屋+倉庫の増築が行われていた。基本的に、上屋は左右非対称に架けられており、一方は土蔵の屋根の長さに合わせて設計され、他方は軒の出を長くとっている。広い軒下はそのまま作業スペースや農作業用具の物置として活用されるケースと、納屋を増築して室内化されるケースに分類できた。信州に普及している建てぐるみとも違って、ほとんどは母屋から独立して建てられていた。



図5 白山神社周辺で出土した矢じり(2024.9.27筆者撮影)



図6 山麓から山地にかけての眺望(2024.9.27 筆者撮影)



図7 土蔵の活用例(2024.9.27 筆者撮影)

3) 考察

現地調査によって、村の風景に変化が生まれていることが明らかになった。昔はおそらく「山地、畑(裏庭)、集落、田んぼ」からなる千年村の典型的な構成だったが、避暑目的で畑部分に別荘が出来て、新旧入り乱れる集落景観になった。また、旧集落の建物群は微高地上に高密度に分布しているが、新しい家は畑に分散して配置している。今後は分散型集落の形成やライフスタイルの多様化が進むと予想される。

土蔵を文化財として神聖化せず、あくまでも生きた建築として、使用者が自由に手を加えていることも印象的だった。同様に上屋や納屋を増築した事例が茅野市の土蔵に多いことが分かっているが、正式な名称まではわからなかった。[3]

このように、昔からの風景を無理して保存しようとはせず、時代の流れに沿って合理的かつ柔軟に活用する姿勢こそが、この集落を千年にとどまらず万年の歴史を紡ぐ村として持続させてきたのではないか。

4) 集落を象徴する風景 「矢じりガーデン」

この集落が古くから人間の活動の場であり、千年以上の歴史を持つ土地であることを象徴するアイテムが「矢じり」だ。この土地は、近代以前は針葉樹、近代以降に畑や果樹園として利用され、現在は別荘地として新しい用途に適應している。このように、過去(矢じり=歴史)と現在(ガーデン=現代的景観)の融合によって賢く生き抜いてきたという特徴をもとにして、「矢じりガーデン」と名付けた。

参考文献

- [1]『新版 角川日本地名大辞典』Japan Knowledge Lib,2024.11.26閲覧
- [2]『箕輪町誌(自然現代編)』箕輪町誌編纂発行委員会,1976.9.30
- [3]『笹原の郷愁風景』郷愁小路,2024.11.26閲覧



図8 断面ダイアグラム

03 諏訪郡弓良郷 / 長野県伊那市手良中坪・手良野口・手良沢岡

担当：寺村安也乃（千葉大学）
池田公輔（東京都大学）



図1 大字領域(寺村加筆)国土地理院地図より

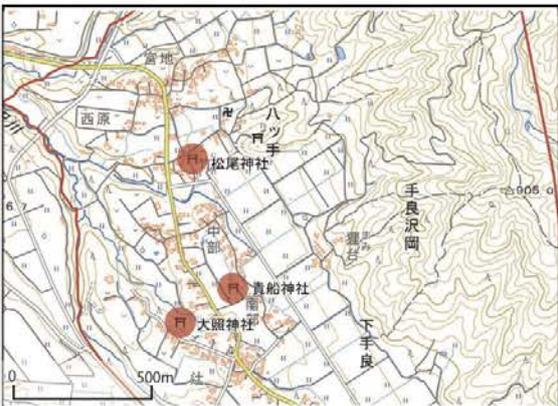


図2 手良沢岡の神社3社(寺村加筆)国土地理院地図より



図3 治水地形分類図(寺村加筆)国土地理院地図より



図4 狸台の集落(寺村撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

・弓良郷

→弓良郷は、平安期に見える郷名で、「和名抄」において諏訪郡七郷の1つであり、現伊那市の天竜川左岸の手良・福島地区を中心とする地域と考えられている。「新撰姓氏録」によると、この地域は「弓良公」という帰化人によって開発されたという伝承があるが、実際に現在手良地区に大百済毛・小百済毛という地名が残っており、弓良公に関連する馬具などの副葬品が出土している。

・貴船神社、松尾神社、大照神社

→往古、三社は氏子共催で松尾社の舞台上で演芸を行った。戦後しばらくは続いたが、中止となる。

・土地利用

→不動峰の麓で、南流する棚沢川が分流することで、段丘、氾濫平野、扇状地が複雑に入り混じる地形となっている。氾濫平野や扇状地は主に田畑として利用し、段丘や一部山の麓に集落を形成している。

2) 実見によって得られた客観的情報

手良野口(大豊、東松)、手良沢岡を中心に実見した。

・環境

手良野口の大豊は南に棚沢川、北に不動峰があり、北斜面に水路が整備されている。東松は扇状地で、三方を山に囲まれ、北部の山から東松を流れる水は、山を迂回して北西に流れ、手良沢岡を通り天竜川へ向かう。

・集落構造

手良野口:大豊は横断する2本の道沿いに集落が形成され、周囲に水田が入り混じる。集落を見渡せる北部の山麓に常光寺が位置する。東松は集落を中心に水田が広がり、南部に張り出した山麓に野口八幡神社が位置する。

手良沢岡:段丘を縦断する道沿いに集落があり、中心に神社が位置している。山麓に広がる扇状地や氾濫平野を水田として利用している。狸台という場所に他の集落から離れ、山の麓に位置する小さな集落があり、周囲との特別な関係性が見られた。

・建物の特徴

手良野口の集落周辺には、蔵の周をポリカーポネー



図5手良野口のポリカーボネートの蔵(寺村撮影)



図6 手良野口の水田と集落(池田撮影)



図7 手良野口の水路と洗い場(池田撮影)

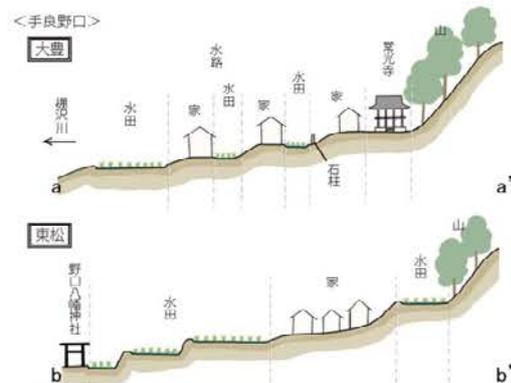


図8 断面ダイアグラム

トで覆い、半屋外空間を形成している特徴が見られた。現在は、主に、洗濯干し場や農機具を収蔵する倉庫として利用していた。

3) 考察

弓良郷の位置は天竜川と三峰川の流域に乗っかる河岸段丘にあり、さらに棚沢川が地形を削りとること、ミニ段丘を造り出しており、段丘が入れ子状になった複雑な地形の中に集落がある。そのため、集落の構造は場所によって異なり、家-田-寺社が多様に組み合わせる断面構造は、主に3つのタイプに分類できた。その中で、水田の配置は、必ずしも住居より低地にあるのではなく、高地にもみられ、これらは水路に従ってつくられた集落構造ではないかと推測する。周辺には今でも水路を利用しているとされる痕跡が多く発見され、集落の水は人の生活基盤でありながらも、まちの特徴的な風景を為している。また、集落の民家の型式が定まっておらず複数の様式が混在しており、かつて交通の要所であったのではないかと推測される。

4) 集落を象徴する風景と名前

地形を住みこなす折衷的暮らし

山裾の複雑な地形に適応し、水や農業、建築において暮らしを工夫してきた生活の知恵が、弓良郷の集落の風景を形作っている。

<参考文献>

- ・『角川日本地名大辞典』
- ・諏訪市博物館なんでも諏訪百科
- ・《上伊那地方》(<https://www5a.biglobe.ne.jp/~iwanee/nagano-kamiina.htm>)

5) 断面ダイアグラム



04 伊那郡福智郷／伊那市富県北福地・南福地

担当：ミョウ イシューアン (千葉大学)



図1 比定の大字領域(QGISより筆者作成)

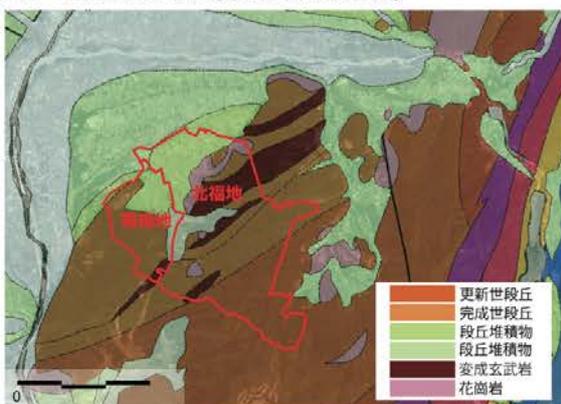


図2 土地条件図(QGISより筆者作成)

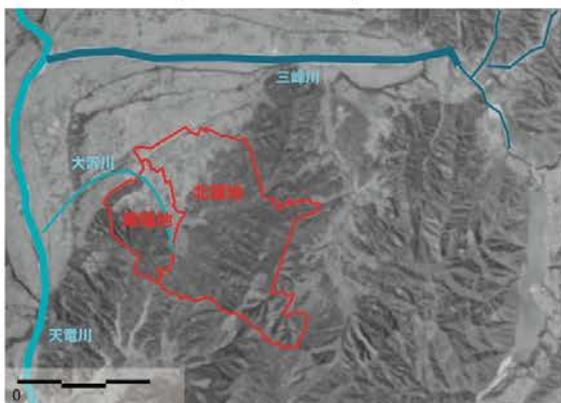


図3 1961年空中写真(今昔マップ・QGISより筆者作成)



図4 竹松城跡・遠望(20240928:ミョウ撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報
富県では、天竜川及び三峰川の沿いに「富県段丘」という大型の扇状地侵食台地が広がり、古くから人々の暮らしの場となってきた。

この段丘上は、三峰川からの水路を開削して開田した高鳥谷山の北西面を流れ降りる大沢川の水利を得て、高遠藩の時代から大切な穀倉地帯であった。多くの古墳群もみられ、原始時代の頃から相当規模の大きな集落があったと思われる。

北福地と南福地に、山を挟んで整備された田畑と密度が低く配置された住宅が存在する。北西部に城跡が複数存在する。

【註】
高遠藩：信濃伊那郡高遠の藩名。関ヶ原の戦いの後、高遠には正面の子正光が2万5000石で入部したことにより高遠藩が成立した。高遠藩が存在していた時期、地域の農業や水利システムは非常に重要であった。特に水の管理は、農業生産や集落の発展に密接に関わっていたと思われる。
「国土交通省中部地方整備局 『段丘崖及び断崖の斜面樹林』公式サイト (<https://www.cbr.mlit.go.jp/tenryo/think/heritage/pdf/097.pdf>)」より引用

2) 実見によって得られた客観的情報

・断面構造 (図7)

三峰川から見ると、全体は階段状の水田になる。三峰川に沿って、三段階の河岸段丘が形成されていて、新たに開かれた水田がある。上に向かうにつれて、昔の水田が広がり、その間にいくつかの住宅が点在している。鳳凰寺は高鳥谷山の山腹に位置していて、その周囲には竹松城跡がある。

・平面構造 (図8)

高鳥谷山の北西面を流れる大沢川の水を利用して、一旦貯めて、水田に流れるという仕組みである。

3) 考察

●金鳳寺

金鳳寺は、現在の浜松市にある玖延寺(きゅうえんじ)の天宗元康(てんそうげんこう)大和尚が五百年以上前にこの地で開いた。本堂は1799(寛政11)年の大火で焼け、1814(文化11)年に再建された。現在の本堂の屋根は以前と同じ形で、かやぶきから銅版にふき替えた。

●御殿場遺跡

三峰川によって形成された段丘上に広がる眺めの良い場所にある。昭和41年(1966)年、この地の開田



図5 金鳳寺(20240928:ミヨウ撮影)



図6 御殿場遺跡(20240928:ミヨウ撮影)

事業に先立って緊急発掘調査が行われ、縄文時代中期中葉の住居跡5基、縄文時代中期後葉の住居跡11基、平安時代の住居跡3基、時代のわからない住居跡4基が検出された。第12号住居跡からは、国重要文化財に指定された縄文土器、「顔面付釣手形土器」がほぼ完全な状態で出土している。

4) 集落の特徴及び興味

●行った場所の道路は狭くて、直接農道で運転する場合もたくさんある。

●アカマツは元々川沿いに存在していた。アカマツは、特に木材や松脂などを目的とした伐採が行われてきたため、徐々に人々の生活圏から里山の方に移動し、現在のように里山に「引っ越した」ような状況が形成されてきた。

5) 集落で象徴する風景と名前

「水田を中心とした集落」。

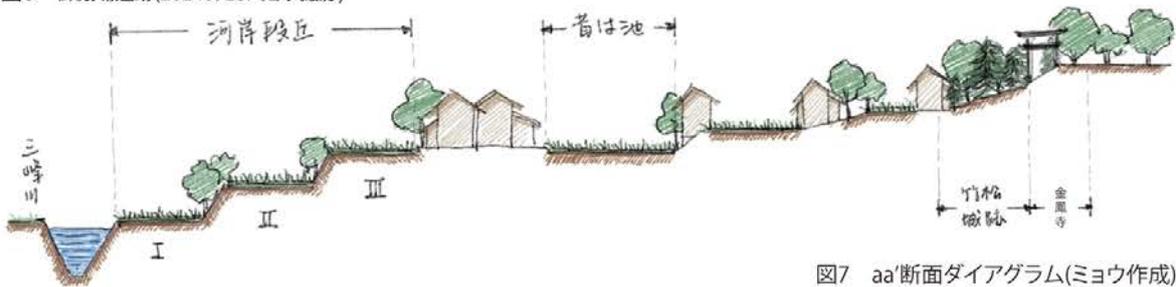


図7 aa断面ダイアグラム(ミヨウ作成)

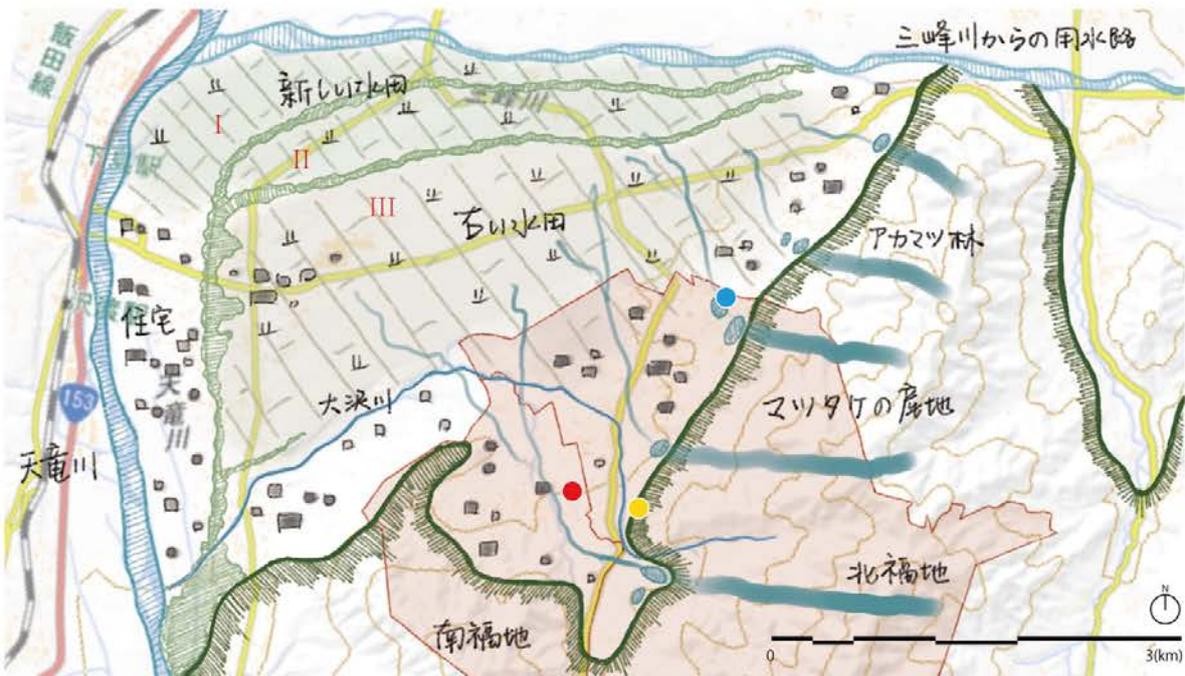


図8 富県概念図(ミヨウ作成 今昔マップのベース図を使用) ●竹松城跡 ●金鳳寺 ●御殿場遺跡

05 信濃国伊那郡入谷庄(荘園)

担当：大里溪（東京都市大学）
小林翔生（滋賀県立大学）
原田馨子（慶應義塾大学）



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

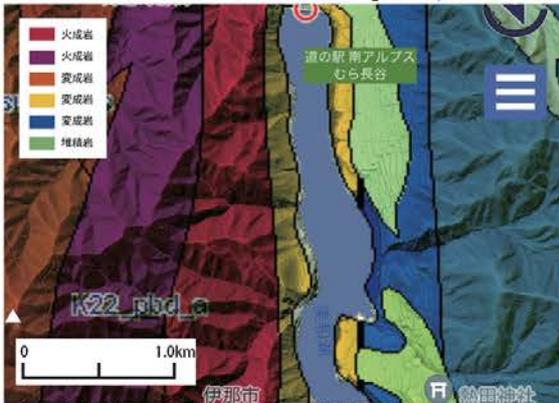


図2 20万分の1日本シームレス地形図 今昔マップより



図3 1967年地形図(筆者加筆) 今昔マップより



図4 溝口露頭の様子(0928原田撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

1958年に美和ダムというダムが形成され、その際に集落の半分は沈み、特に農地が多く沈んだ。(*1) 1952年と1962年の地図を比較するとダム建設・ダム湖形成以降、山側に水田が急に拡大していることがわかる。現在の棚田は1960年代以降の農地改良の産物であると推測される。また、「溝口露頭」という中央構造線が露頭している箇所がある。

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

美和ダムの上流に今回訪れた「溝口」という集落は位置しており、残存する河岸段丘上の集落群と農地がある。溝口には中央構造線があり、その谷に向かって地滑りが起きて地滑り地形になっていると考えられる。

・共同体

調査中に子供とすれ違ったり、畑や田んぼが維持されている様子から、ある程度の規模の共同体が動いていることが考えられる。また熱田神社に関して、文献から、日本武尊東夷征伐の帰路、三峰川の上流にて大蛇を切り住民の苦慮を除いたという伝説が残っている。いまだに神楽が残っているという点からも熱田神社が豪華で、大規模であったことがわかる。(*2)

・集落構造

文献等の調査から、「美和ダム」の建設によって、反対運動が起こったことがわかった。その結果昭和32年、代替地となるダム上段地域の開田に「美和一貫水路」が土地改良事業により建設されたこととなった。事前の文献調査で、注目していた1962年以降に拡大した農地もこの水路を用いてのものだと考えられる。(*3)この水路の影響で、川、宅地、農地という集落構造になっており、良くみられる川、農地、宅地という構造とは異なる集落構造になっている。

〈参考文献〉

- *1国土交通省中部地方整備局天竜川ダム統合管理事務所公式サイト「美和ダム60年のあゆみ」
- *2「長野県町村誌」
- *3美土里ネットながの「土地改良事業とともに 美和一貫水路(みわいっかんすいり)」2012



図5 棚田で稲作が行われている農地(0928原田撮影)



図6 棚田で畑作が行われている農地(0928原田撮影)



図7 「美和一貫水路」のポンプ(0928原田撮影)

3) 考察

ダム建設に伴い、水路がつくられ、その結果、湖、宅地、農地という集落構造になった。ダムからトンネルで山越に下流の集落に用水路を引いているケースもあり、上流が下流に与えた恩恵がある。下流の集落において近場の天水だけでは賄いきれない規模の農地が広がっているのは、こうした土木インフラによって可能になった点がある。

1962年以降に開発された棚田は歩いていくと、いくつかの農地が畑に転用されていることに気がついた。おそらく、稲作だけでは稼げなくなったことや、水路から離れており湖に近い、稲作に向いていない農地が畑に転用されていったのだと考えられる。現地の方の話から、中央構造線の東と西で地質が大きくことなり、東側の方が開墾しやすかったため荘園が広がった、ダム開発の労働者により下流部のまちの繁華街が繁栄したということがわかった。

4) 集落を象徴する風景

「狭い谷の生きる道」

谷に向かった地滑り地形にできた集落であり、地滑り地形を生かして棚田をつくっている。ダム建設が決定したことで、もともとあった水田は沈むことになった。その代わりに、上に水路を通すことになり、稲作がしやすい農地は水田のままで、湖側は宅地とした。その後、稲作が営めなくなった場所は畑へと変わっている。様々な状況に応じてこの土地の活用方法を変えて行った様子を見ることができる。

ダム建設前

ダム建設後

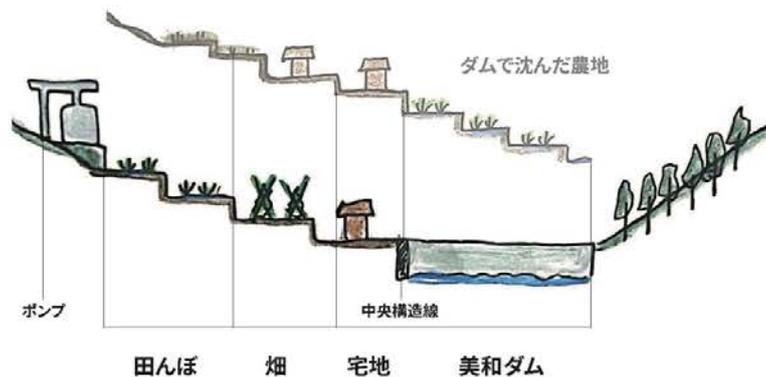


図8 断面ダイアグラム



図1 比定大字の領域(GoogleMapより)

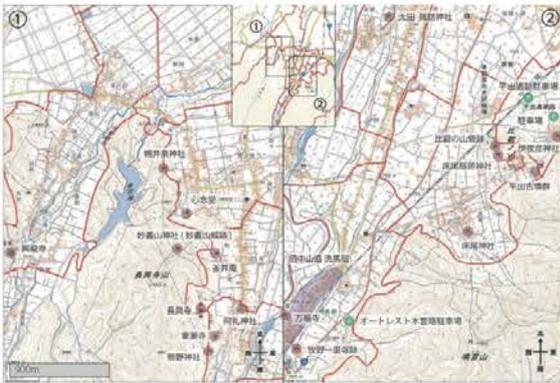


図2 現在の基盤地図と比定範囲(猪野尾加筆地理院地図より)



図3 集落の用水路にある「ドンド」の様子 (2024/09/29 羽賀撮影)



図4 屋根の棟の端飾り「雀おどり」(2024/09/29 羽賀撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

宗賀郷は、奈良井川上流右岸に位置し、河岸段丘上に展開する。主な河川として犀川水系の奈良井川。この支流の小曾部川、天竜川水系の小野川がある。平出遺跡は縄文時代から平安時代の複合遺跡で、住居跡や様々な出土品が出土する。和名類聚抄の筑摩郡「崇賀郷」や万葉集東歌の「須賀の荒野」は当地に比定される。(「角川日本地名大辞典」より)

2) 実見によって得られた客観的情報

宗賀の平出遺跡と平出博物館から調査を開始し、車で河岸段丘を横断しての調査を行った。

・環境

河川は灌漑に利用されたばかりでなく、昔は川漁も盛んであった。

また、河岸段丘の段丘面に位置する平出遺跡の近くには「平出の泉」があり、石灰岩の空洞に集まった伏流水が湧き出しているとされている。湧水は水門を通過して集落の用水路へと流れ、下流では水田地帯である長田の農地を潤している。

宗賀北西部の荒地では湧水も届かず、水はけも良い地である事から、現在ではぶどう畑やワイナリーなどが多く存在している。

・共同体

平出の泉近くの集落では、水の争いを避けるため堰堤が築かれた江戸時代から厳格な水の管理が行われている。今でも年一度、農家で作る組合が水抜きをして清掃作業を行っている。

・社会文化

「ドンド」「ドドンビキ」：集落に流れる用水路の各所には「ドンド」や「ドドンビキ」と呼ばれる、浅い水面に接するための足場が設けられている。上下水道が整備される前はここで野菜を洗っていた。

「雀おどり」：集落に多く存在する本棟造の民家の屋根には、火事避けのための水の神様であるという「雀おどり」が飾られている。

〈参考文献〉

「ひらいで絵地図」 塩尻市教育委員会・塩尻市平出博物館発行



図5 平出の泉 (2024/09/29 羽賀撮影)



図6 河岸段丘を上から見下ろした風景 (2024/09/29 羽賀撮影)

3) 考察

平出遺跡は日本でも有数の複合古墳群であり、5千円前の縄文時代から人が住んでいた地域である。その暮らしを支えたのは湧水であると考えた。

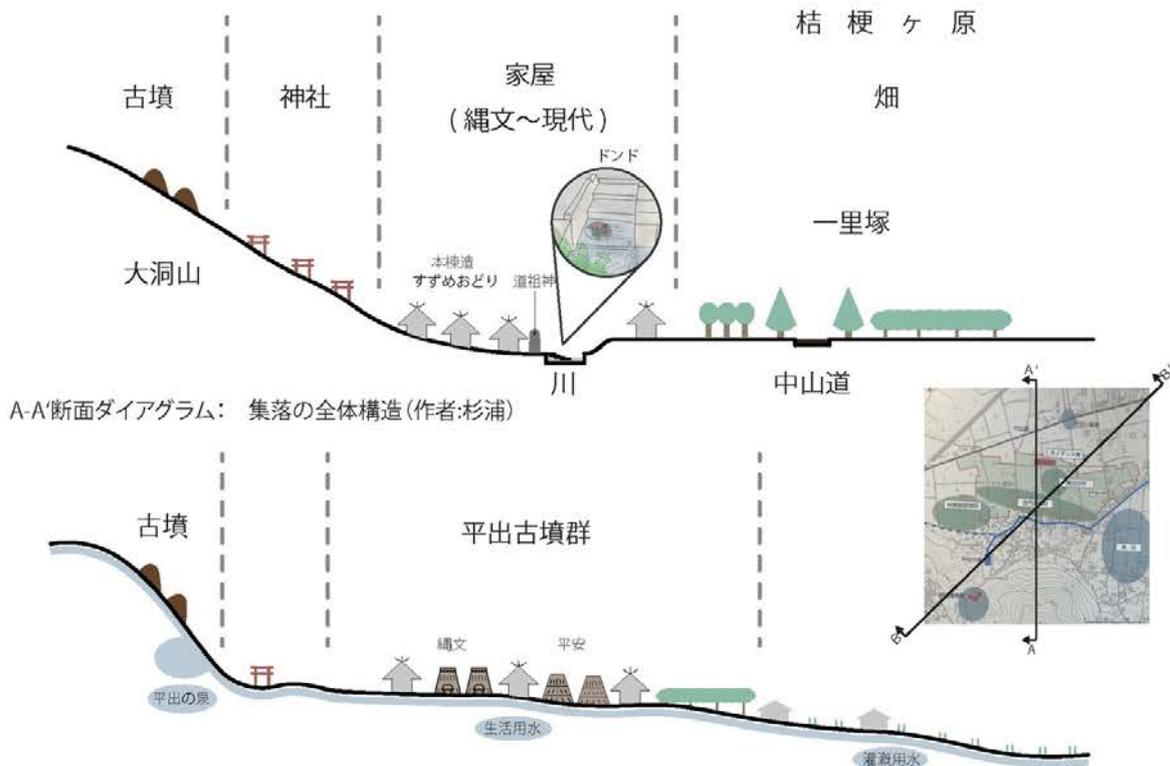
現在も、遺跡公園の南西には湧水からの用水路が流れる本棟造の民家が並ぶ集落、北西には葡萄畑、東には水田地帯が広がっている。また、古墳群や伊夜彦神社、比叡ノ山に置かれた旧家の祠などは、集落の形成と泉との強い関連を示していると考えられる。本来であれば水が乏しい段丘面の地であったが水温も一定な水が安定して存在していたことと、水利権を争うことなく徹底した管理の元で大切にされてきたため、長く暮らしが続いてきたのだと考えた。

4) 集落を象徴する風景

「5千年湧き出る水と暮らす郷」

前ページの「共同体」や「社会文化」から読み取れるように、5千年もの暮らしを支えてきた平出の泉を大切にしていこうという姿勢が集落の風景の中にも現れていた。

5) 断面ダイアグラム



A-A'断面ダイアグラム: 集落の全体構造 (作者: 杉浦)

B-B'断面ダイアグラム: 湧水の流れと集落の構造 (作者: 杉浦)

07 筑摩郡大野庄／長野県波田町上波田、中波田、下波田

担当上紺屋佐真（滋賀県立大学）



図1 比定の大字領域（筆者加筆）Google mapより



図2 波田堰（20240929上紺屋撮影）



図3 町の北西にある梓川頭首工（20240929酒田撮影）



図4 家屋の洗い場（20240929小谷撮影）

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

波田町(旧波多村)は信濃国筑摩郡に属し、平安時代には荘園「大野庄」として記録され、広大な原野だったことが知られる。1874年、上波田村、下波田村、三溝村が合併して波多村(のちの波田町)が成立。⁽¹⁾ 河岸段丘地形を背景に、段丘下では灌漑農業が発展し、和田堰と波田堰(図2)が利用された。『和名抄』(937年)によれば、波田赤松に堰堤を設け、和田堰が整備されていた記録がある。⁽²⁾ 江戸時代には14か所の取水口が存在したが、洪水や干ばつによる水争いが頻発した。明治期には1877年に各堰で水利組合が設立され、調整が進んだ。特に、1871年着工、1882年竣工の波田堰は、梓川頭首工で取水した水を9.37kmの用水路で三溝地区に供給し、地域の灌漑農業を支えた。さらに、大正から昭和初期にかけて統合事業が進行。1926年から1931年にかけて、取水口を統合し、頭首工と幹線水路を造成した。⁽³⁾

2) 実見によって得られた客観的情報

波田堰と和田堰は、それぞれ河岸段丘の2段目と1段目の縁を通り、主に灌漑農業用の水路として利用されてきた。一方、上波田、中波田、下波田は段丘の上の段(3段目)に位置しており、水路の水を直接生活に利用していたわけではなかった。集落には生活に密接に関わる別の水路が存在し、黒川から水を引いて野菜洗いやじょうろへの水波みに使われていた。(図4)また、上波田では「雀おどし」(図5)と呼ばれる棟飾りが確認され、中山道東地方でも「カラスおどし」などの名称で見られる装飾と関連があるとされている。⁽⁴⁾さらに、上波田や中波田には集落の領域を示す鉄製の門(図6)が存在していた。

3) 考察

波田地域における水利システムと集落構造の分析

1. 水利システムと生活圏の分化

波田地域の水利システムは、農業用の水路(波田堰、和田堰)と生活用の水路に分かれており、この分化は地域社会の水資源の効率的な利用を示している。波田堰および和田堰は主に灌漑を目的としており、農業生産性の向上を図っていた。一方で、集落内では生活用水路が独立して存在し、黒川からの水を引くことで、農業用水路とは別に日常生活に必要な水を



図5 雀おどし (20240929酒田撮影)



図6 集落の領域を示す鉄製の門(20240929酒田撮影)



図7 灌漑農業で広がる農地の風景(20240929小谷撮影)



図8 鉄門と集落の土地関係 作成者:上紺屋Google

確保していた。この分化は、農業と生活衛生の両立を目指した工夫であり、地域の水資源の安定した供給を支える重要な要素となっていたと考えられる。

2. 文化的装飾と領域意識

「雀おどし」という棟飾りは、地域文化の美意識を表していると同時に、他地域との文化的交流を示す証拠でもある。特に、中山道東地方との類似性は、波田地域が孤立した存在ではなく、広範な文化圏の一部であったことを示唆している。一方、鉄製の門の存在は、集落内の領域意識と社会構造を象徴している。門は単なる物理的な境界線ではなく、住民の共同体意識を強化する役目や、祭りで使うしめ縄を作る装置であったとも考えられる

4) 集落を象徴する風景と名前

「段丘と水が紡ぐ暮らし」

波田町は、梓川流域の河岸段丘という特徴的な地形に支えられた地域であり、水利システムと地域社会の形成に深い影響を与えている。町の水利システムは、農業用水路(波田堰、和田堰)と生活用水路を分けることで、効率的な資源利用を実現している。これらの水利システムと集落構造は、地形的制約や環境条件に応じて巧妙に工夫されており、農業用水と生活用水の分化、文化的装飾の導入、など、地域の特性を反映した高度な社会構造が見受けられる。

5) 断面ダイアグラム (図9)

参考文献

- 1)「角川日本地名大辞典, 20 長野県」p252, p897
- 2)<https://www.azusagawa.jp/about/outline1/>梓川土地改良区
- 3)あずさ書店編集部『幻の大寺院 若沢寺を読みとく』あずさ書店、2010年9月、ISBN9784900354678、43ページ
- 4)<https://www.masupage.com/nakasendo/omou/suzume-odori.html> 松谷正弘氏のブログ

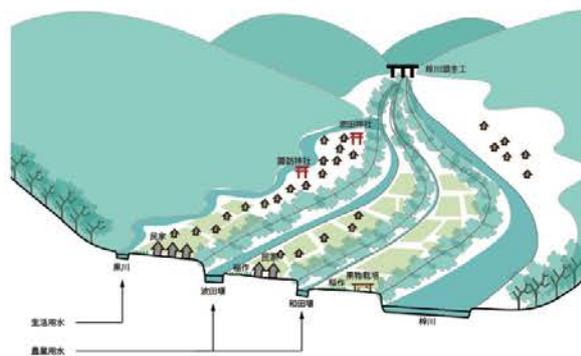


図9 断面ダイアグラム 作成者:小谷

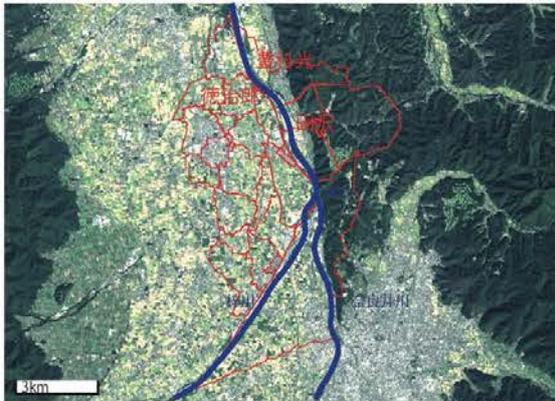


図1 比定の大字領域(国土地理院地図より筆者作成)

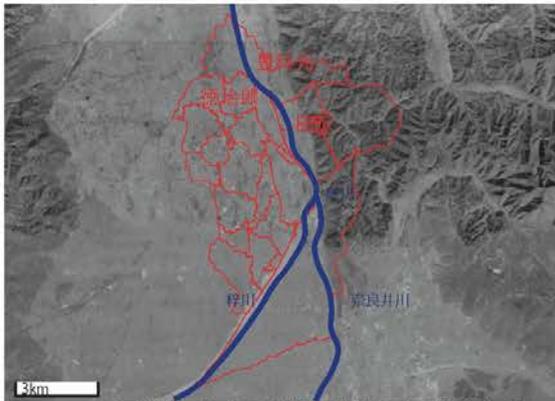


図2 1960年代航空写真(国土地理院地図より筆者作成)

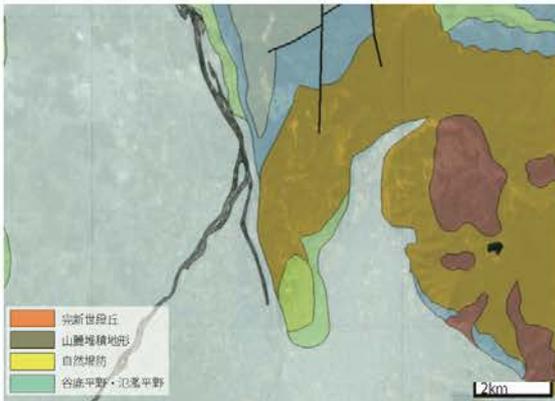


図3 明治26年測図(シームレス地質図より筆者作成)



図4 筑摩山地から見た犀川と田沢(20240929:望月撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

豊科は安曇野市の東部に位置し、東の筑摩山地と梓川および黒沢川の扇状地によって形成されている。犀川東部には山地、西部には緩やかな平坦地に水田が広がっている。梓川以南の現松本市島内の区域は、梓川流路の変遷を考慮した際に当郷内に含まれたと考えられる。

2) 実見によって得られた客観的情報

本調査では、郷内の「徳治郎地区」と「田沢・豊科光地区」に着目し、それぞれの地区の比較を行った。

●徳治郎地区

・環境

現在は犀川の西側に位置しているが、文禄年間には犀川の東側に集落があったと記録されている。氾濫で流路が東へ移動したことにより、徳治郎地区は親村の田沢本郷とは川を隔てた集落となった。

・地域経営

中世の地主である徳治郎がこの地を開発したとされており、稲作が豊富であった。

・集落構造

散居村的な村の配置で、広大な水田に大きな家が点在している。平地に水田、微高地に家屋という配置になっている。

●田沢・豊科光地区

・環境

東側に山地、西側に川があり、両方からの恵み受けることができる。山地と川から少し離れた段丘上に家屋と田畑があり、田畑は西側方向から徐々に削れている。

・地域経営

稲作を中心に養蚕や酪農、ブドウ畑、山から粘土を採取して瓦産業を行うなど、複数の産業を掛け持ちして行うことが多い。1980年頃には山を切り売りし、ゴルフ場が建設される。

・集落構造

段丘に沿って土地利用の層ができていく。山地から下って、桜坂地区など最近できた宅地が存在し、篠ノ井線を挟んだ先に古くから残る家屋と土蔵、面積の小さい田畑が並ぶ。



図5 徳治郎地区の家屋と田畑(20240929:倉田撮影)



図6 豊科田沢の家屋と田畑(20240929:倉田撮影)

参考文献

活動報告 安曇野の屋敷林 その歴史的まちなみを訪ねて、屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト

©,2011.3.15

3) 考察

徳治郎地区と田沢・豊科光地区は、かつて一つの村として存在していた。そのため、段丘に住む人々が低地へ田畑を拡大した可能性があると考えられる。(広い低地を利用することで豪農が生まれ、徳治郎地区では中世の名手といわれる地主が誕生したのではないだろうか。

しかし、1600年頃に氾濫によって犀川の流路が変わり、村が二つに分かれた。徳治郎地区は田沢本郷と川で隔てられた集落となり、豊かな水田や大きな家屋が残ったと考えられる。一方、犀川の東側では、水田の規模が小さくなったため、他の産業にも手を広げる必要が生じたと推測できる。

徳治郎地区のように稲作を主軸とした単一産業で経営を行う集落と、田沢・豊科光地区のように複数の産業に依存することで、一つの産業が衰退しても他の産業でバランスを保つ集落との対比が見られる。また、田沢・豊科光地区では山地と川から適度な距離を取った位置に家屋があることで、両方からの恵みを受けながら、災害は受けづらいという点でもバランスを保っていると言える。

4) 集落を象徴する風景と名前

考察を踏まえ、「バランス力で長持ちするリスクマネジメント村」とした。

5) 断面ダイアグラム

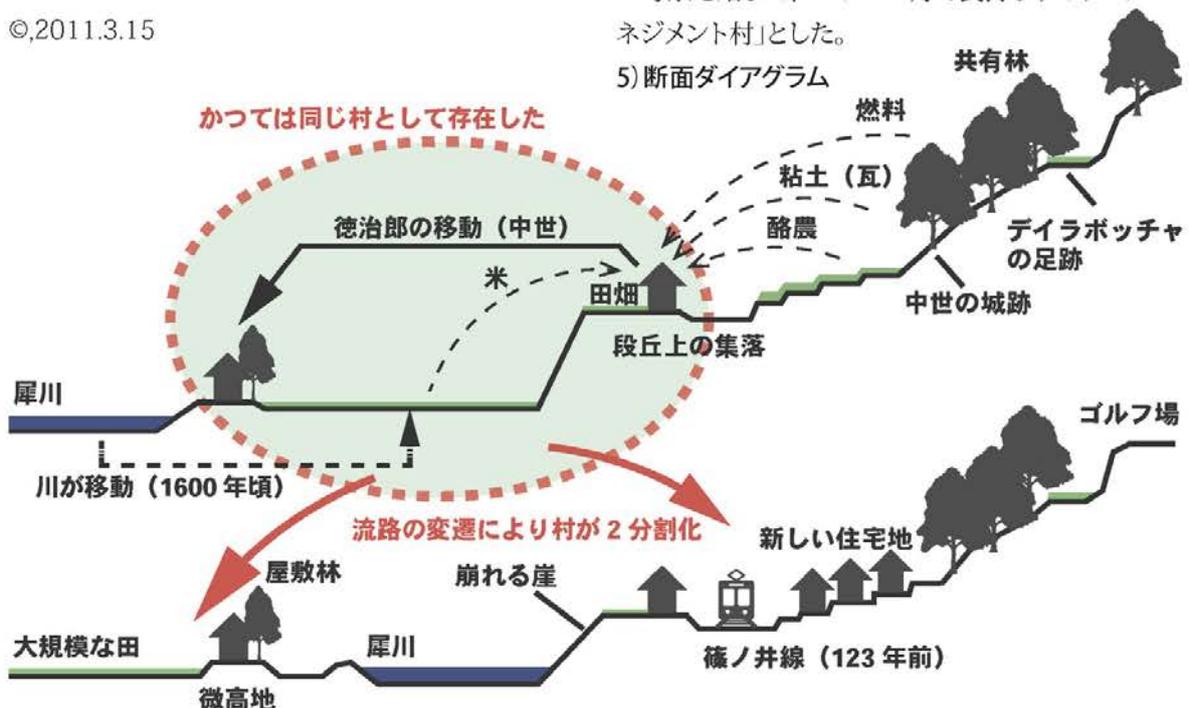


図8 断面ダイアグラム(倉田作成)



図1 比定の大字領域(筆者加筆) Google Mapより

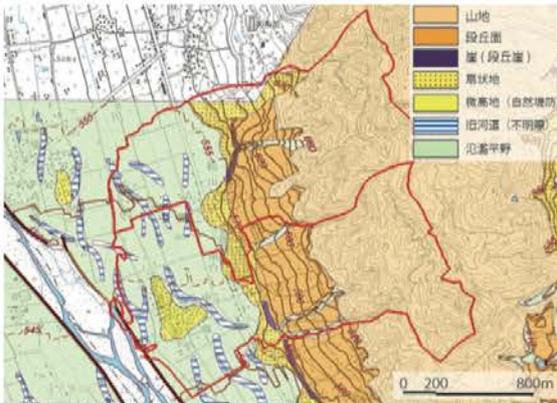


図2 土地条件図 国土地理院より



図3 1977年地形図(筆者加筆) 国土地理院より



図4 段丘上のブドウ畑(20230929:筆者撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

安曇郡前科郷は、池田町中鶺に比定される。中鶺は、昭和32年からの地名で、中世から近世までの「鶺山」と「中之郷」の二つの地区から構成される。前科郷は奈良期から平安期に見える郷名で「和名抄」安曇郡四郷(高家郷・八原郷・前科・村上郷)の1つである。正倉院御物である天平8年(736年)の調庸綾布墨書銘に郷名が確認される。^[1]元文4年(1739年)に寄付を募り、明和5年(1768年)に四柱神社が誕生した。^[2]

参考文献:

- [1]『角川日本地名大辞典』
- [2]信州あづみ野 池田町 ホームページ (<https://www.ikedama-chi.net/>) 2024/11/28最終閲覧

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

明治期から段丘面で養蚕、氾濫平野で稲作が兼業で行われてきた。社会の変化により、稲作が主流となり、かつての桑畑では現在ブドウが栽培されている。鶺山:山間部の水源から水路が引かれ、農業用水として利用されている。水源に近い北部から南部に発展し、中央集落は段丘面の扇状地を切り開き、高密度に家々が並ぶ(図2・5)。

中之郷:川に近く氾濫平野の自然堤防上の微高地に位置している(図2・6)。

・交通

中央に高瀬川と平行する県道51号線が通る。

・地域経営

段丘面の土地は、外部のワイナリーに貸し出され、工房やブドウ畑として利用されている(図4)。また、池田町は移住を推進しており、実際に中鶺に移住した住民も少なくない。

・集落構造

鶺山:昭和51年の圃場整備前、四柱神社は「田中の宮」と呼ばれ、水田の間に位置し、信仰と生業が近接していた。現在は水田となり痕跡は見られない。江戸時代中頃には、四柱神社から分社した四神社が斜面上部に建てられ、神社・集落・水田が带状に並ぶ構造となった。参道の延長線上には墓地があり、周辺の空き家に住む移住者やカフェも見られる(図8)。



図5 斜面に石垣を築く鶴山集落(20240929:呉雄仁撮影)



図6 田畑と住宅が混在する中之郷集落(20240929:筆者撮影)



図7 鶴山の段丘上墓地からの眺め(20240929:呉雄仁撮影)



図8 集落の主要地を示す平面図(20241028:筆者作成)

中之郷:鶴山と同様の神社・集落・水田からなる構造が見られ、墓地は水田と集落の間に境界を隔てるように位置していた(図8)。現在、四柱神社は二十五社の敷地内に移設され、2つの神社の拝殿が並ぶ。

3) 考察

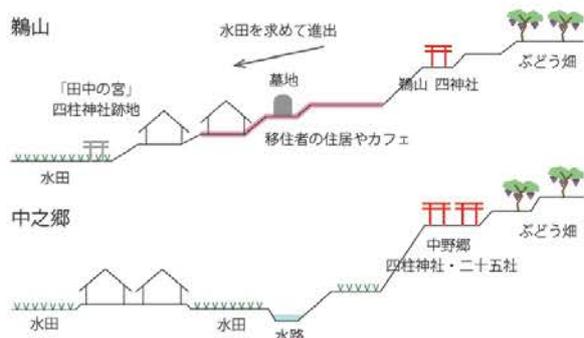
鶴山:ヒアリングによると、中央集落はかつて東側の斜面上部に位置しており、養蚕が盛んな明治頃は段丘付近で生活していた。1930年頃から、水田を求めて麓に進出したと考えられる。集落東部に残る比較的平坦な土地からは鶴山全体を一望できる(図7)。現在の集落は石垣で整備され、家々が密集して並び都市的なスケールで計画的に展開したとは考えにくい(図5)。鶴山と中之郷との境界付近には、新たな住宅団地が形成され、コミュニティが生まれている。

中之郷:前科郷の主要な集落であり、塀や植栽が低くおおらかな家構えが特徴である。敷地内の庭や畑ではこどもたちや農作業をする夫婦の姿が見られ、生活が安定して継続する様子が確認された(図6)。

4) 集落を象徴する風景と名前

「不変なる景色と変動する村」

中鶴では、圃場整備に伴う四柱神社の移設や、利便性を求めて麓への居住地変更が見られた。また、外部からのワイナリー参入や、移住促進により斜面上部の集落と神社の間に3つのカフェがオープンするなど、新たな動きが見られた。ヒアリングによれば、景観に魅了され「Nostalgia」というイタリア料理店を開いた例もあり、集落・水田・河川・山々が带状に連なる景観はイタリアを感じさせるのかもしれない。今後もこの景観が人々を引き寄せ、変動を受け入れつつ集落が持続していく可能性があると考えられる。



あずみくん やほらこう ながのけん あずみのし ほたかやばら
09 安曇郡八原郷 / 長野県安曇野市 穂高矢原

担当：Beatrice Sonia Ferlisan (早稲田大学)



図1 比定の大字領域 (筆者加筆) GoogleSatelliteより



図2 土地条件図 (筆者加筆) 国土地理院より



図3 現. 矢原1910古地図 (筆者加筆) Stanford Librariesより



図4 段となっている稲田 (20240929:奥村撮影)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

「日本地理志料」によると、矢原郷の範囲は矢原・重柳・寺所・踏入・熊谷・中曾根・小海渡・成相・柏原・堀金・田尻・田多井・牧・小倉である。地名の由来は湿地帯を意味する「やわら」が転じたものとされる。

矢原郷は、信濃国安曇郡の中心部に位置し、現在の安曇野市穂高地域を中心とする広がりを持つ地域である。北アルプスの麓にあり、山からの豊富な湧水が地域全体を潤している。この水資源を活かし、古くから堰を利用した水利が発達しており、特に江戸時代に完成した「矢原堰」とそのあとできた「十ヶ堰」は農業の発展に大きく寄与した。地理的には肥沃な平野部を形成し、周囲の村々とともに安曇郡の開発拠点となった。

2) 実見によって得られた客観的情報

今回の調査では、本郷と比定される現. 安曇野市穂高矢原(図1に赤に塗られた部分)を訪れた。

・環境

この地域の地形は一見平坦に見えるが、実際には東側に向かってわずかに傾斜している。扇状地として知られるが、近年の人口増加に伴い、地下水資源だけでは生活水の需要を賄うことが難しくなってきたため、堰が設けられたと伺った。この自然の地形を活かし、北アルプスからの水が堰を通じて効率的に供給され、最終的に万水川へと流れる灌漑システムが構築されている。この仕組みにより、水田への安定した水供給が可能となり、現在の稲作を支える基盤となっている。また、万水川を挟んだ東側一帯には、広大なわさび田が広がり、地域の特色ある農業景観を形成している。

・集落構造

国道と線路沿いには現代的な住宅や商業施設が整然と立ち並び、交通の利便性を活かした生活圏が発展している。一方、国道から少し離れると、広大な田畑が広がり、穏やかな農村風景が広がる。また、集落の中心部には矢原神明宮が位置し、地域の信仰や文化の中心として重要な役割を果たしていたと伝えられている。さらに、矢原神社の背後には臼井家の立派な住宅があった。この住宅は、矢原堰の建設に関わった臼井弥三郎(かつての名主)の一族のものである可能性が高い。



図5 矢原堰(20240929:奥村撮影)



図6 十ヶ堰(20240929:奥村撮影)



図7 矢原郷の道と堰との関係(筆者作成)

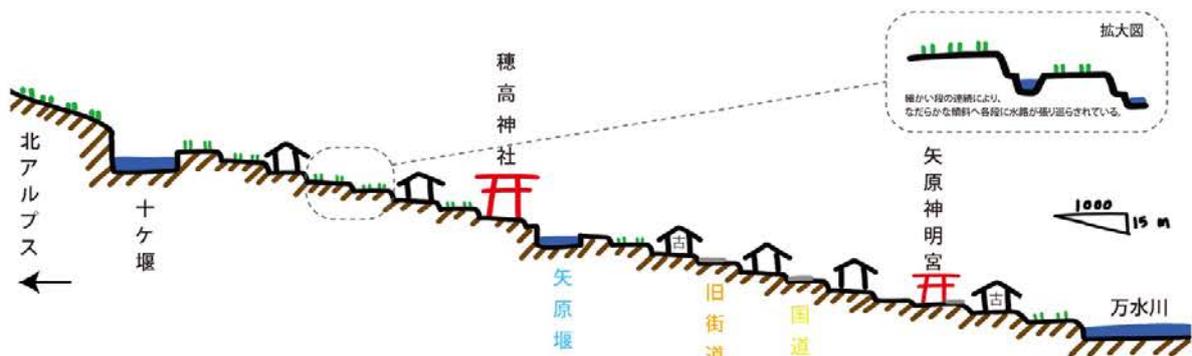


図8 a-a 断面ダイアグラム(筆者作成)

・堰の歴史

この地域では、堰の果たす役割が明確に見て取れる。矢原堰は中世以前から存在していたとされ(1654年に白井弥三郎が開削)、矢原郷周辺の田畑を潤すために整備され、地域の農業基盤の形成に大きく貢献した。一方、十ヶ堰は江戸時代の文化14年(1817年)に完成した大規模な堰で、安曇野全域に水を供給し、より広範囲の田畑の開発を可能にした。

3) 考察

矢原郷はもともと湿地帯や低地が広がっており、農業を営むためには水利の確保が不可欠であった。そのため、矢原堰が古くから整備され、矢原郷周辺の田畑に安定した水供給が行われるようになり、このことが地域の農業基盤を支える重要な要素となった。

矢原郷と堰の関係は、単なる水利の供給にとどまらず、土地開発や集落の形成にも深く影響を与えたと言える。例えば、矢原郷の古い道は、この堰と並行しており、現在の国道が新たに開通した後も、集落の配置は堰に沿った形で変わらずに存在している。

4) 集落を象徴する風景と名前

「堰の開削と稲作の拡大」

考察にも書いてあるが、堰との関係が強い集落である。

参考文献

角川日本地名大辞典編纂委員会編、『新版 角川日本地名大辞典』、角川書店、1991年。

松本市。年表で綴る・安曇野市誕生まで。[PDFファイル]。https://www.city.azumino.nagano.jp/uploaded/attachment/25136.pdf (参照日: 2024年11月26日)。

11 信濃国 筑摩群 錦服郷/長野県松本市四賀村赤怒田

担当：張心璇（東京大学）
飛川優（慶応義塾大学）
大橋侑莉（東京都市大学）



図1 調査集落図(筆者加筆)地理院地図より



図2 台地側(南)から集落(北)を見る (撮影：2024/09/29 飛川優)



図3 集落(北)から台地(南)を見る (撮影：2024/09/29 飛川優)



図4 主図：分家母屋北側 (撮影：2024/09/29 張心璇)
右上図：分家母屋南側 (撮影：2024/09/29 張心璇)

1) 文献・地図等の情報から得られる客観的情報

赤怒田村は保福寺川中流の両岸に形成された河岸段丘に広がる村で、古代には錦服郡を構成したと考えられ、東山道支道の錦織駅もこの付近と推定されている。天正期には刈屋原郷に属していたが、寛永六年(1629)の検知では村高276石余として独立している。明治8年(1875)刈屋原村に属し、同22年(1889)には錦部村に属し、現在は松本市(旧四賀村)に属している。(参考文献：『長野県立歴史館「書籍・史資料/古文書目録名検索/筑摩郡赤怒田村文書」』)

2) 実見によって得られた客観的情報

・環境

集落を南北に分つように保福寺川が流れており(図1)、両側に河岸段丘が広がっている。保福寺川の北側は低地から山へとなだらかに傾斜しており、南側は低地の先に台地がある。

・交通

北側の保福寺川沿いに松本市街と上田を結ぶ県道181号線が東西に通っているが、幅員も狭く交通量も少なかった。一方で、江戸時代までは参勤交代で使用されており、主要な道であったと考えられる。(図2)

・農作物

北側の緩やかな斜面は棚田として利用されており、山側に行くにつれて畑として利用されているところも見られた。(図2)畑の中では特に大豆が多く栽培されていた。中には放棄地となっている畑も見られた。南側も低地は田んぼとなっており、石垣が多く見られた。急な崖を登った台地の上に2000年代に新しく整備された住宅街があった。台地はかつては桑畑として利用されていた。(図3)

・集落構造

古い家は北側の山裾にあり、低地に行くにつれて分家が多くなる。集落の中腹にある分家は、家屋の瓦に書いてある文字が特徴的で、山奥側には「麒麟」「龍」「神」、低地側には「鳳凰」「虎」「鬼」という文字が書かれていた。(図4)北側の棚田は、棚田の間に新たな道路が補正されていた。この道路は元の住戸の敷地と重なる場合もあり、それによって不自然に断面が見えている蔵等もあった。更に、住戸の外構部分にある石段が道路拡張のために削られ、新旧の時代の異なる石段が並列していたりした。石段のきれいさだけでなく、積み方素材の違いによって、作成者や時代の



図5 道路拡張で切断されたと思われる小屋 (撮影:2024/09/29張心璇)



図6 集落内唯一の商店と街の人々 (撮影:2024/09/29張心璇)

関係を知ることができた。(図5)

北側の最も山に近いところに神社があるが、害獣対策の電気柵によって集落とは仕切られていた。また、集落の中には道祖神や馬頭観音が複数見られた。

3) 考察

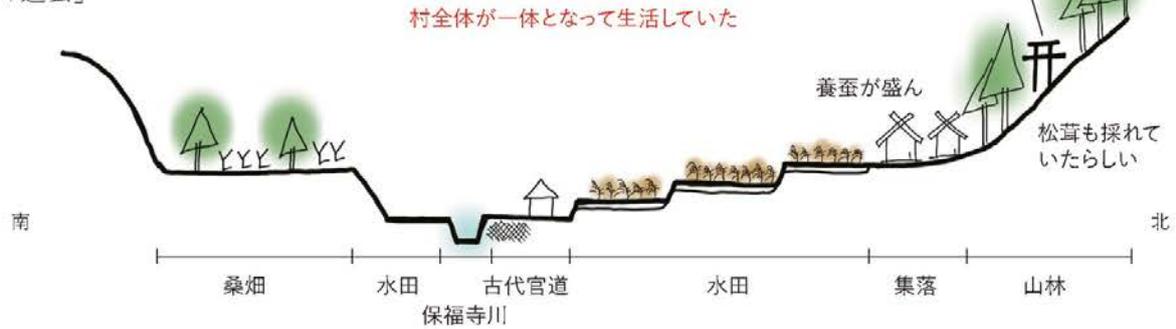
この集落は、昔と現在で生活範囲が異なっていると考えられる。というのも、図8断面ダイアグラムにあるように、昔は台地の桑畑から川を挟んで水田が広がり養蚕を行いながら村全体が一体となって生活していたと推測できる。しかし現在は、台地には団地が広がり、北側の山裾の集落には東西にいくつかの道路が通り、分家が点在していることから集落内が小さなスケールに分割されているように感じる。かつて水田だった場所も畑や放棄地になっており、集落全体での生活循環は失われつつあると考えられた。

4) 集落を象徴する風景「変化と共存する河岸段丘」

台地上には団地の開発、集落内への新たな道路整備、個人アーティストの為にギャラリー、小綺麗な商店等、かつてからの地形や自然環境を活かしながら、時代に適した発展をとげ、過去の面影や生活が共存している風景が印象的だった。

5) 予測できる過去と現在の集落構造 (図1のa-a'断面)

「過去」



「現在」

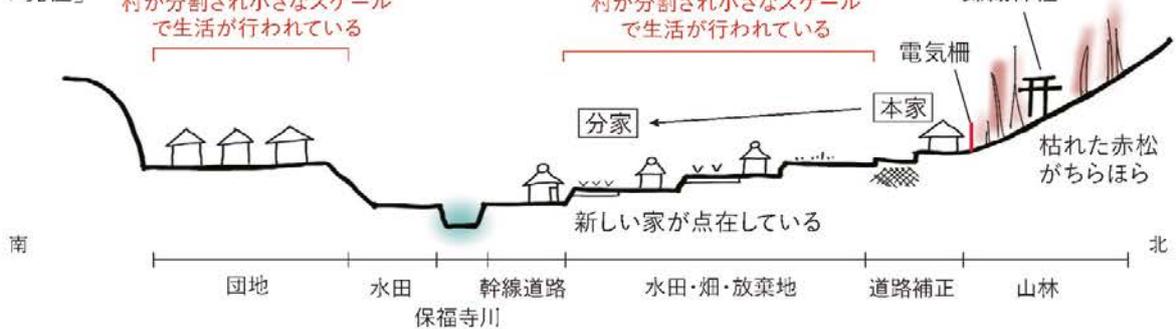


図8 断面ダイアグラム (作成者:大橋侑莉)

第4章 2024年度伊那谷・松本盆地疾走調査 考察

福智郷 千年村認証に向けてのメモ

— 千葉大学 木下剛

1. 「吉田手記」について

(1) 鳥居龍蔵と吉田琢三

今年は何時になく忙しくて疾走調査から戻って三月も後に、頂いた資料に目を通すという体たらく。それは「福地の歴史（遺跡と古墳について）」（吉田琢三，作成年不詳）というPDFで、表紙の題名と著者名の間「鳥居龍蔵」と手書きされている（写真1）。長野県伊那市北福地の田畑和範さんや吉澤政己さんからメールで送って頂いたものである。田畑和範さんは田畑貞壽先生の甥に当たる方で、今年の千年村疾走調査で福智郷の案内を吉澤さんと一緒に差配して下さった。田畑先生というのは私の学生時代の恩師で、先生が退官された翌年に私は大学に奉職した。それはさておき、福智郷（いまは福地）はしたがって田畑先生の故郷でもある。吉澤政己さんは郷土史家である。

さて、鳥居龍蔵であるが、この人は（ググったところ）帝大の著名な考古学教授で、大正年間に福地を調査したとこの資料に書いてある。本資料はその時の教授の発言または報告を、調査のお供をした吉田琢三という人物が聞き書き、あるいは咀嚼して手記として残したもの（手書き資料）を、後世、伊藤恒良なる人が活字に起こしたもののようである。吉田琢

三がいかなる人物かは不明。伊藤恒良氏は、調べたところ、元美術の教諭で、2006年に富県公民館の館長をお勤めになり仕事の合間に画を描いておられる方（当時70歳）である。この方が正確にいつ吉田手記を活字化したのかも未確認である。



写真1 『福地の歴史（遺跡と古墳について）』

この時点では、本資料の出自について、それ以上のことはわからず、田畑氏や吉澤氏に伺わねばなるまいと思っていた矢先、同じく田畑氏から頂いた別の資料「北福地の地名 土地の記憶を訪ねて」を読んでいたところ、「吉田手記」と呼ばれる資料があることを知る。そして、この手記について以下のような註が付されていた。曰く「地元の歴史愛好家だった吉田琢三（1901～1995）氏が残した「福地の歴史～遺跡と古墳について～」（未刊）を指す。彼は富県村役場吏

員だった大正7年8月、東京帝国大学教授鳥居龍蔵博士が伊那谷の遺跡調査に見えた際、富県地域の案内係を務め、博士が語った内容など中心に20数ページにまとめている」（北福地地名調査委員、2015）。

ということで、はからずも冒頭の「福地の歴史（遺跡と古墳について）」の出自が明らかとなった。この手記中に、大正7年8月、北福地で旅館を営む叔父から、鳥居龍蔵博士が調査に来るので面倒を見てやってくれと頼まれ、つい引き受けてしまった！といふ微笑ましい行がある。ともあれ、この資料、実に驚くべき内容で、福地が類稀なる〈千年村〉であることが示唆される。「示唆される」と書いたのは、この手記、鳥居博士が語った言葉がそのとおり引用されているわけではなく、博士の発言を吉田氏が咀嚼しつつ自身の知識や考え、他文献からの引用も交えながらまとめられており、したがって、どこが鳥居博士の発言に基づく内容で、どこが吉田氏の見解なのかを判別するのが難しいからである。また、鳥居龍蔵博士自身の発言についても、調査に基づく客観的事実なのか、推測で語っているのかを判別するのが難しい。

（2）「吉田手記」素描

ともあれ、吉田手記の内容を、千年村的視点から素描すると以下のようなになる。

そもそも鳥居龍蔵博士は、この地に遺跡調査にやってきた。特に留意して調査が行われたのは、縄文前期より弥生時代に至る住居跡であり、国の重要文化財に

指定された顔面付釣型土器（約4700年前）を出土した御殿場遺跡（写真2）で、その他にも旧石器時代から弥生時代の羽場遺跡、縄文前期～の三ツ木遺跡、馬具を多く出土した古墳等に関する記載がみられる。つまり、この地では、平安時代の定住地である福智郷（和名抄）が成立する以前から、人々の暮らしが営まれてきたわけで、その理由についても鳥居博士と吉田氏は考えを披瀝している。



写真2 御殿場遺跡
（伊那市富県、2024年9月28日撮影）



写真3 段丘上からみた凹地形
（伊那市富県北福地、2021年11月6日撮影）

その要点は、この地に「福地盆地」と吉田氏が記すところの池沼湿地帯（鳥居博士の指摘に基づく）があり、そこで産される食料資源を捕獲採集すべく縄文人が住みつき土師の村を形成し、やがて畿内から高度な水稻土木技術を持った開拓団が入植してきて先住民と協力して開田

が進められた。また、古東山道（東の山の道）が福地を通り、駅があった可能性があることについても言及されている。そして、駅の成立を可能ならしめた要因として水田と牧（古代の牧場）の存在が挙げられる。さらに、この地に多く見られる田畑姓について、土着の豪族福地氏（鎌倉以降に田端に改姓）、大和源氏源頼親を祖とする同族、下福地の豪族田畑氏の記載を認める。

2. 〈千年村〉の視点からみた北福智

(1) 「福地盆地」について

吉田手記を通覧して、〈千年村〉の、主に環境要因から見て最も重要と思われるのは、「福地盆地（福地湖）」と呼ばれた地形とその水源であるところの山麓湧水である。この盆地地形（凹地形）はいまでも確認できる（図1、写真3）。かつてこの地に池沼があったことは、疾走調査の際に案内してくださった吉澤政己氏らからも説明があった。おそらくは吉田手記を踏まえたご説明と思われる。この地形と水源こそが、——この地に人々を定住させ狩猟採集と初期開田を可能ならしめただけでなく、今日に至るまで水稲耕作・水利システムを支え続けてきた——長期生存の最も基本的な要件といえるだろう。

また、北福地（のみならず大字富県）は、その域内に開墾地を大きく上回る広大な山林を含み、北福地区有林および富県財産区として厳重に守られてきた（図2）。これらは水源林として機能していると考えられ、山麓から染み出した湧き水がこの地に湿地や時に池沼を形成し、

早くから開田を促す要因となっただけでなく、今も現役で田畑を潤し続けている。したがって、山林はこの地の水利システムを構成する不可欠の要素といえる。山林は、古くは狩猟採集を支え、やがて栽培経済を補完し、そして今日まで水源林として重要な役割を担ってきた。富県や北福地に限らず、丘陵地帯や山間部の前近代集落にみられる、山林を含んだ広大な境界設定あるいは村切り、字切りは、狩猟採集や水源涵養など、資源確保の観点から説明できるのではないかと思う（写真4）。

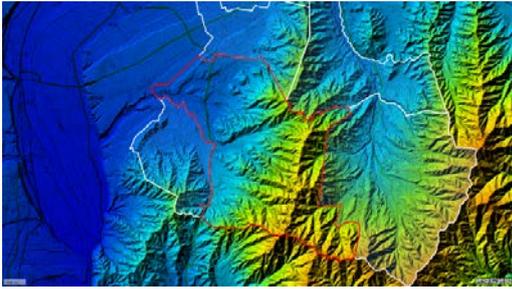
図1 福地盆地の名残とみられる凹地形（地理院地図を用いて作成，2025）



写真4 北福地周辺の空中写真（地理院地図，2004年撮影）



写真5 北福地周辺の空中写真（地理院地図，1961～1969年撮影）



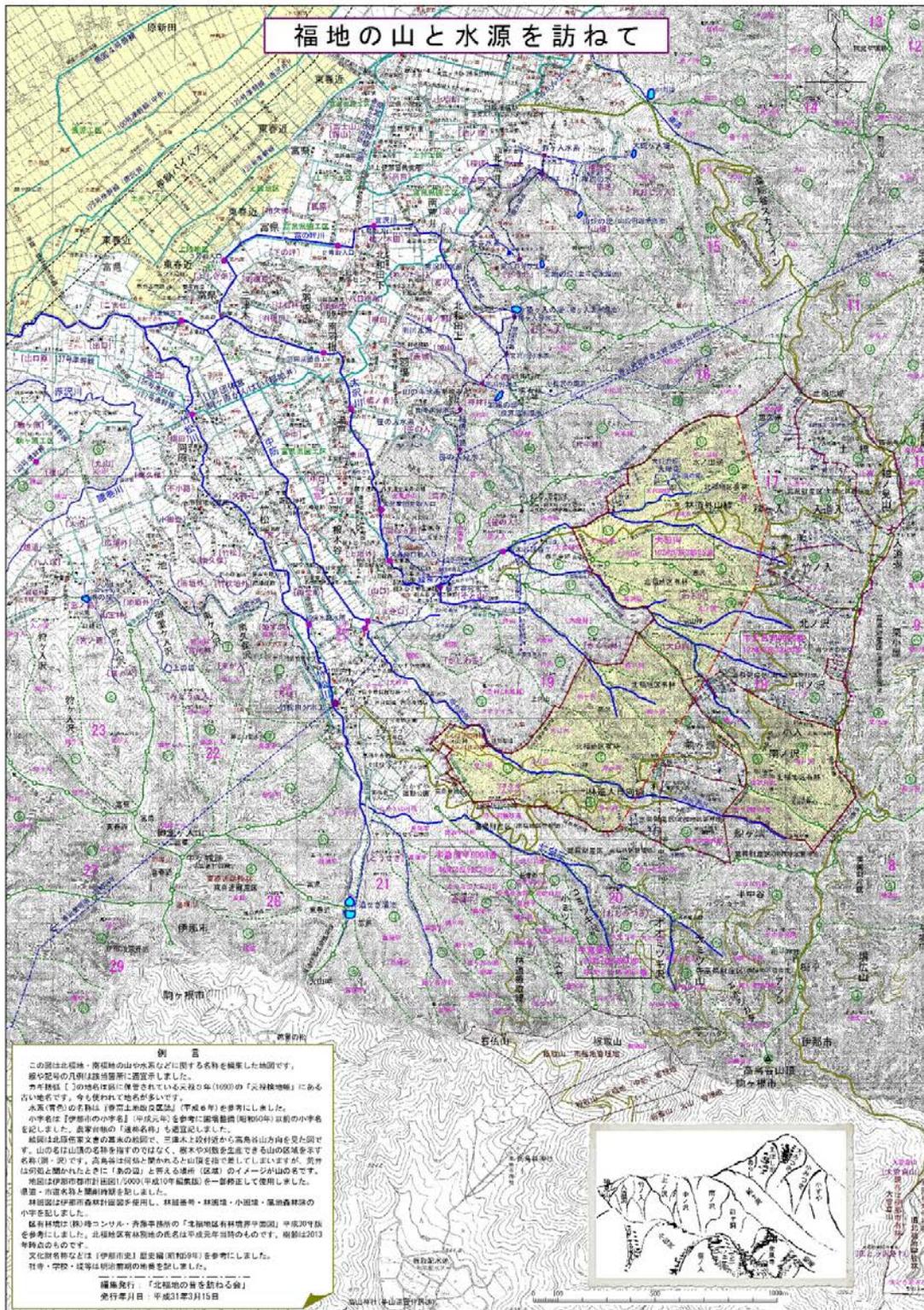


図2 北福地の区有林等(黄色の網掛け部分)と水利システム(北福地の昔を訪ねる会, 2019)

(2) アカマツ林について

ところで、伊那谷にはアカマツ林を多く見、北福地にもアカマツ林がある（写真6）。この地でアカマツ林がいつ頃成立したのか把握していないが、一般に段丘堆積物や花崗岩が広がる地質にはアカマツ林が多く見られる。また、アカマツ林の存在は、古くからこの地で資源採集目的の伐採（遷移のリセット）が繰り返されてきたことを裏付ける。疾走調査で、昔はもっとアカマツ林が広がっていたという話を、さも昨日のことのようには地元の方が語るのを聞いた。私はこの話を、昔のアカマツ林は今より標高の低いところにも広がっていたが、開墾されて以前より標高の高いところでしか見られなくなった——つまり林縁が山側に後退し水田に置き換わった——と理解した。ところが、この地域で撮影された最も古い空中写真（1960年代）をみても林縁の位置は今と全く変わらない（写真5）。あるいはもっと昔の出来事なのかもしれないが、お話いただいたのはご高齢の方々ではなかったので、上の世代から聞いた話なのかもしれない。しかし、空中写真をつぶさに見てみると、段丘崖の樹林（アカマツ林かどうかは不明）はたしかに減っているように見える。いずれにしてもこの地の開墾（開田）は、長期的、広域的には、山側から川側へ降りていったことが吉田手記からも明らかなので（写真7）、その過程でアカマツ林あるいは山林が後退していったと考えられるが、それは現住民が思い出話の如く語れる近い過去のことではない。アカマツ林から水田への転換は、とりもなおさず狩猟採集経済から稲作農耕（栽培経済）への移行を示すものだが、アカマツ林の後退は加えて伐採文化（遷移リセット）の後退をも意味しよう。



写真6 アカマツ林と棚田
(伊那市富県北福地, 2022年10月30日撮影)

写真7 天竜川方向の広大な水田の風景
(伊那市富県北福地, 2021年11月6日撮影)



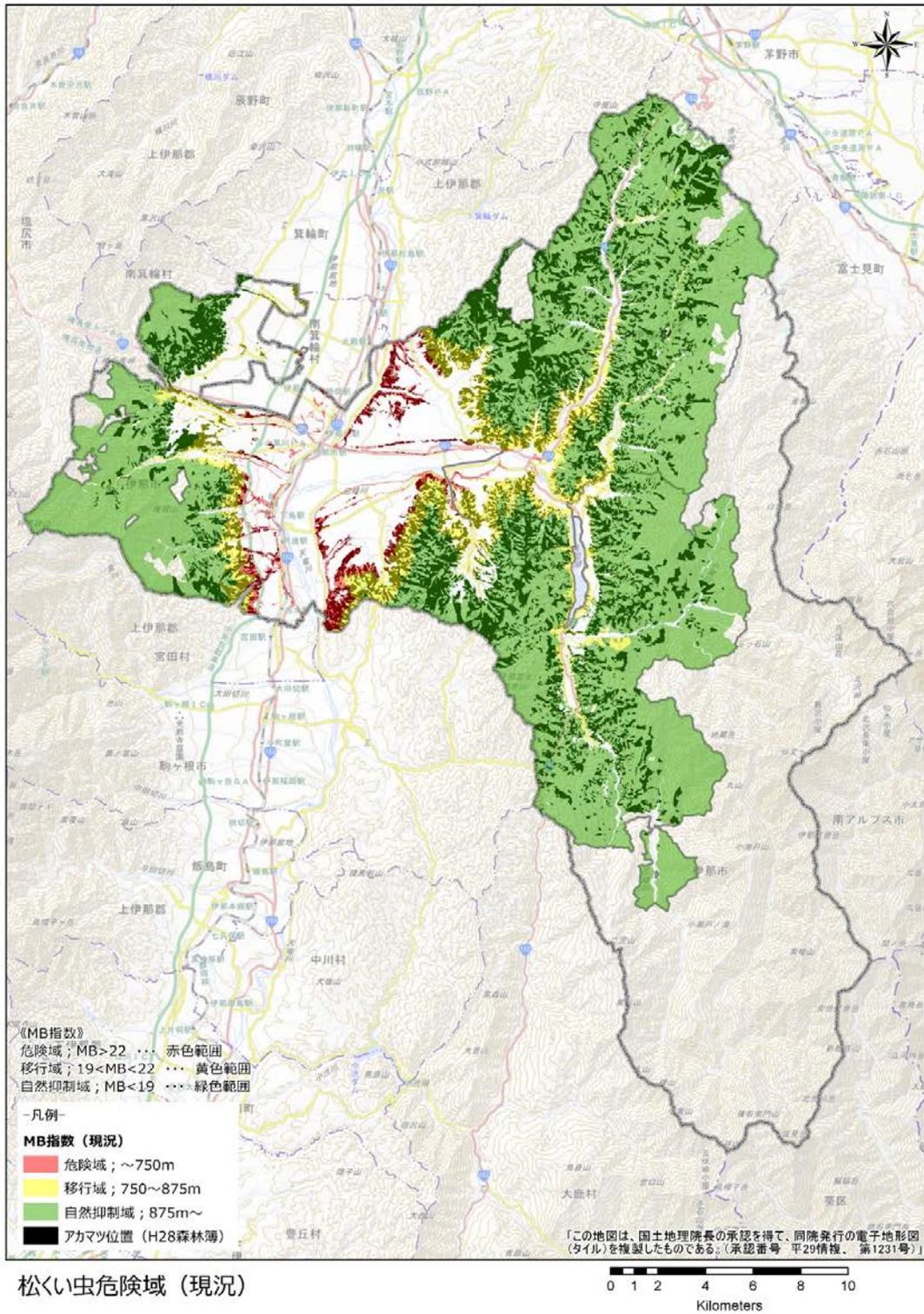
一方、アカマツはそれ自体利用価値が高く、建材、燃料、肥料として重宝されただけでなくマツタケを育む。しかし、近年伊那谷でもマツノザイセンチュウによる松枯れが進行し、福地周辺のアカマツ林もMB指数（月平均気温15°Cを閾値とした積算気温から推計）の危険域（ $MB > 22$, 標高 $m < 750$ ）や移行域（ $19 < MB < 22$, $750 < \text{標高 } m < 875$ ）が集落近傍の林縁域や標高の低い区域に広がっている（図3）。しかし、長野県林業

総合センター（2011）によれば、西日本では、マツノザイセンチュウによる松枯れ被害の影響で、マツタケ発生林の面積が減少しているが、長野県内ではまだ発生林の大部分を占める標高 800m 以上の地域には松枯れ被害が及んでいないため、生産者の管理意欲も高く健全なアカマツ林からマツタケが継続的に収穫されている。十年以上前の状況であり、生産量はもちろん減少傾向にあるが、図 3 を見ると、標高 875m 以上が自然抑制域（ $MB < 19$, 標高 $m > 875$ ）となっており、まだ健全なアカマツ林が広範囲に残っている印象を受ける。今後の気候変動（気温上昇）によっては更に自然抑制域が狭まることが推測されているが（伊那市, 2018）、この地のアカマツ林は、生育地の標高ゆえ気温上昇による松くい虫（松枯れ）被害に対してレジリエントであるといえる。アカマツ林でのマツタケ生産は、農林業の複合経営という観点からも評価され、長年にわ

たりメインカルチャー（稲作）を補完してきたと考えられる。余談だが、富県上新山（北福地の東隣の大字）には松茸博士こと藤原儀兵衛さんという方がおられ、各地の松茸生産指導にあたっておられる。この地で古くからマツタケ生産が行われてきた証左である。

ここで、先の水田とアカマツ林（生産林）逆転の話に戻ると、マツノザイセンチュウ（とその一要因としての気温上昇）による松枯れの進行は、別の面から水田と生産林のゾーニングを決定づけたといえるであろう。しかし、このようなゾーニングを経てなお自然抑制域

（ $MB < 19$, 標高 $m > 875$ ）の山林（複合経営手段としてのマツタケ山）を字内に残存せしめているというのは、大字という歴史的な社会・空間単位の持つスケールメリットというほかない。



松くい虫危険域（現況）

図3 伊那市の現況 MB 指数区分図 | 2019 年度作成松くい虫危険度マップ（伊那市，2023）

(3) 古東山道（東の山の道）と井上井月

その他、〈千年村〉を支えた（というより導いた）と考えられる交通要因として古東山道の存在（推定）が挙げられる。古東山道とは律令制下の東山道ではなく、それ以前の原初的、自然発生的な交通路で、「古東山道」「東の山の道」などと呼ばれた。この経路は、一志茂樹氏が古墳時代の滑石製石像模造品の出土地をたどり推定したもので、阿智村の神坂峠、立科町の雨境峠、佐久市望月の瓜生坂峠、軽井沢町の入山峠を結ぶ（上田市立信濃国分寺資料館，2009）。この道中は、天竜川右岸（竜西）の賢錐（かたぎり）駅（松川町上片桐付近に比定される）を過ぎたところで天竜川を渡渉、駒ヶ根、宮田村、富県を経て三峰川を渡り、さらに杖突峠を越えて茅野に至る（図4）。



図4 『延喜式』の東山道（長野県史通史編第1巻より）
（長野市ホームページ）

吉田手記はここでも重要な指摘をしている。すなわち、賢錐駅を過ぎた古東山道は駒ヶ根から川沿いではなく山（火山峠）を越え、福智郷の中心部を經由して高遠に至るルートが推定されているからである。同手記はまた、北福地の根木谷（禰宜屋）に、古東山道を軍道として機能させるための兵站基地（駅）が置かれたとしている。そして、駅を成立させる要因として、駅長家が必要とする数丁歩の自作田を確保できたことを指摘する。さらにこの軍道を通じて近畿の高度な鉄農具や水田開発技術を身に着けた人々が開拓団を組織してこの地に入植しさらに開田を推し進めていったとする歴史を描いている。律令制下（福智郷の時代）では、やはり軍道に欠かせない伝馬の確保のため、周辺の山麓に牧（場）が築かれ、根木谷には郷長や牧長の館、牧子の集落があったと考えられるとも述べている。

このあたりの事実関係は、どこまで史料的な裏付けがあるのか門外漢の私には全く判断できかねるが、この地に古代福智郷が成立し得た理由としてかなり魅力的で説得力のある説である。この道はいまでも、山懐に抱かれながら福地の地をして交通の便を良くし、のみならず眼前に広がる木曾山脈の大観と相まって極めて開放的な雰囲気をおこの地に与えるのに一役買っている気がする。

時代は遥かに下って明治のことであるが、1886年（明治19年）の暮れ、火山峠下の田んぼ（当時の上伊那郡伊那村、現在の駒ヶ根市東伊那）に一人の老人が行き倒れていた。伊那谷に滞留した漂泊の俳人井上井月（いのうえせいげつ）その

人である（図5）。倒れている井月を発見した村人達は、村に迷惑をかけるまいと井月を戸板に乗せて火山峠を越え隣村富県村の南福地某所に置いて帰った。これを見つけた福地の村人が井月と旧交の深かった老人に告げると、老人はまた村人を頼んで隣村河南村の縁故の深い某氏の処へ運んだ。某氏は兼ねてより知っていた井月入籍の家へと、若者達の肩を借り三峰川を越えて運び込み、これが井月臨終の家となる。翌春のことであった（復本，2012）。それまでの三十余年、井月は伊那谷の各所に多くの足跡と俳句を残した。行き倒れていた伊那村から隣村また隣村へと引き渡されていく井月は倒れてなお放浪の人であった。時に乞食同然だった井月は、自由気ままな寄食寄宿生活を送る、伊那谷のいわば居候であったが、明治の世にこのような放浪と漂泊の人を受け入れ、生存を許した伊那谷の寛容と豊かさに思いを馳せて筆を置く。



図5 下島勲による「乞食井月」の素描（井上井月顕彰会）

補遺

2021年11月5日(土), 6日(日)：木下、田畑貞壽先生と伊那市を初訪問。初日は伊那図書館北原館長の案内で、高遠、戸台、分杭峠、はびろ農業公園、権兵衛トンネル、信大農学部、伊那市創造館を視察。二日目は、伊那市図書館で田畑先生、北原館長、信大上原さんとシンポジウムの企画打合せ。午後、上原さんと福地郷、手良郷、三峰川霞堤を巡検。

2022年10月29日(土)：富県北コミュニティセンターで開催された、田畑貞壽[著]『生まれ育ったふるさと信州伊那谷のエコランドスケープ—伊那谷の里山・街の景観をよみとく』出版記念シンポジウム（主催：信州大学社会基盤研究所，共催：伊那谷財団）に参加。木下は「田園地域の矜持、守るべきもの〜〈千年村〉という戦略〜」を発表。

2022年11月2日(水)：伊那市議会議員吉田浩之氏より千年村認証の申請に係る問い合わせ。

2023年5月29日(月)：吉田浩之議員より、伊那市議会の6月定例会で「千年村プロジェクト」への取り組みを紹介し、市にも必要に応じて支援してもらうよう一般質問で要望する予定との連絡。

2023年6月15日(木)：吉田浩之議員、令和5年6月伊那市議会定例会にて「千年村プロジェクトへの取り組みについて」一般質問。伊那市ホームページ（最終確認2025年3月16日）

https://www.inacity.jp/shigikai/kaigiroku_chukei/rokugachukei/reiwa05/r0506teireikai/r0506ipp/an/R5-6yosidahiroyuki.html

一般質問のYouTube動画

https://www.youtube.com/watch?v=VYDh0_XRF6Y&t=167s

2023年7月9日(日)：吉田浩之議員より、伊那市の交付金を受け、吉澤政己さんが認証申請に向

けて準備を始めた旨連絡。

2023年12月20日(水)：田畑和範氏より、本年度北福地千年村プロジェクトの申請するため、伊那市の協働まちづくり助成金を使い、地区内で吉澤正巳様がリーダーとなって「北福地千円村プロジェクト実施事業」を立ち上げた旨の連絡。

2024年4月1日(月)：木下より、2023年度千年村大会の資料を田畑和範氏に送る。

2024年9月28日(土)：千年村プロジェクトによる2024年度長野県中部疾走調査で福地郷を踏査。田畑和範氏、吉澤政己氏らに案内して頂く。また、富県ふるさと館大ホールにて即日報告会を開催、意見交換を行う。信大の上原さんも疾走調査に同行。

引用文献

- 1) 北福地地名調査委員 (2015)：北福地の地名 土地の記憶を訪ねて、北福地公民館，p.25.
- 2) 北福地の昔を訪ねる会 (2019)：福地のやまと水源を訪ねて、ただし地図資料.
- 3) 伊那市 (2023)：伊那市 50 年の森林ビジョン～概要と取組～， p.10, 伊那市ホームページ (2025年3月16日最終確認)
https://www.inacity.jp/sangyo_noringyo/noringyo/ringyo/moridukuri/50mv_suishin.com.files/vision_summary_for7years.pdf
- 4) 長野県林業総合センター (2011)：マツタケ山の経営試算，技術情報 140，長野県林業総合センター特産部，同センターホームページ (2025年3月16日最終確認)
<https://www.pref.nagano.lg.jp/ringyosogo/seika/gijyutsu/documents/140-1.pdf>
- 5) 伊那市 50 年の森林ビジョン推進委員会 (2018)：「伊那市 50 年の森林ビジョン」ゾーニング，伊那市農林部耕地林務課，pp.37-43, 伊那市ホームページ (2025年3月16日最終確認)
https://www.inacity.jp/sangyo_noringyo/noringyo/ringyo/moridukuri/50mv_suishin.com.files/50vision_houkokusyo.pdf
- 6) 上田市立信濃国分寺資料館 (2009)：—新生「上田市」発足 3 周年記念事業—信濃の東山道と万葉歌， p.43, 奈良文化財研究所ホームページ (2025年3月16日最終確認)
<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/8218>
- 7) 復本一郎 編 (2012)：井月句集，岩波文庫，下島勲「略伝 (感想を加えて)」，pp.266-267.
- 8) 長野市／長野市デジタルミュージアム，同ホームページ：信濃の東山道 (2025年3月16日最終確認) <https://adeac.jp/nagano-city/text-list/d100020/ht001700>

千年村をバイクで疾走する。そこからわかること。

— 早稲田大学 中谷礼仁

はじめに

以前、2016年の千年村疾走調査は霞ヶ浦周辺であった。その時の報告書に茨城の地形を疾走する気持ちよさを書いた。それは千葉、茨城に特有の舌状台地という文字通り舌の襞状に風蝕した、台地から、谷戸、低地へと展開する様子の中を疾走する車の軌跡がちょっとしたローラーコースターだったからである。その後、霞ヶ浦の辺りに新居を定めた時以来、数十年ぶりに中型バイクを購入した。自宅で作業に行き詰まると、気分転換に霞ヶ浦周辺にバイクでかける。そんな日常が数年続いている。さて長野の天竜川周辺で疾走調査を行うことになった時、バイクで参加することの欲望を抑えきれず、決行してしまった。バイクでの移動には予想しなかった難しい面もあった。たとえば夕方以降の山中の高速巡行は、秋のとば口でも予想以上に気温が下がったし、周囲の様子に対する恐怖心も味わった。上信越自動車道で妙義山沿いを走った時の、黒いローブを纏ったかのようなその山の悪魔的な姿を忘れられない。近世までの人はここを歩いて渡ったのかと思うとゾッとした。また調査日程に迷惑をかけないためには、前後の宿泊が必要条件になることに気づいた時はすでに遅しであった。前日宿泊は組み入れることができたものの、調査後の宿泊までは検討せず、その結果、調査二日目の日程を早退せざるを得なくなった。そういうわけで私は純粹には1日目の行程（開始点であった松本

市以南の天竜川沿い)しか体験できていない。これについては大いに反省するとともに、注意点として記録しておく。また田舎道の場合むしろ自動車の方が気楽に駐車できるのに比べバイクの場合路面条件を常に検討する必要があったり、ごく近距離ごとの調査では煩雑にヘルメットを外す必要もあった。

天竜川沿いの log track

そのようにネガティブな要素も多いバイク疾走調査だが、それでも残る魅力はなんだろうか。それは疾走する立体的な軌跡を体で覚えられることである。現にその様子を今でも難なく思い出すことができる。大地を疾走するという事は、ちょうど針がレコードの溝をトレースして記録された情報を読み上げるかのように、大地のかたちを知覚することである。自動車でもわずかにその感覚はあるのだが、二輪であるバイクはその平衡を大地と二輪タイヤと運転者との絶え間ないフィードバックによって安定させないといけないわけだから（自動車の場合はほぼ大地と四輪タイヤの間でこれらが解決されて、操縦者への情報は格段に低くなる。もちろん運転していなかったさらにわずかになる）、必然的にそのlog（記録）が自分の体に経験として刻み込まれるのだ。これは自動車の運転ではどうしても獲得できない大きな要素だろう。また車体で覆われない剥き出しの体

に入ってくる、知覚情報の豊富さも格段に多い。その分危険も多くなるので必然的に感覚も鋭敏になることも個人的には好みである。



図1 バイクによる地域疾走で得られる情報の豊かさ

今回のバイクによる疾走経験で得られた天竜川のlogを一言で言えば、天竜川の右岸(上流から下流に向かっての方向で表現する)の扇状地のなだらかさや左岸の台地と低地の険しい段丘差であった。つまり天竜川の西側はなだらかで、東側は高低の差がはっきりとしているわけだが、これは当然、それぞれの生活、生産様式の違いとなって現れてくる。日の出の恩恵を受け止めることのできる天竜川右岸(西側)は、住みやすく、またそのなだらかな傾斜によって林業、牧畜業、畑作、稲作の緩やかな成立が期待できる。それに比べて左岸(東側)は低地の土地がわずかであり、また台地が迫っているために、その発展はむしろ台地側に委ねられていた。例えば台地上の伊那は、駒ヶ岳の豊富な湧水によって台地であっても有数の稲作地であった。上下のアップダウンもまた激しい。

以上のように環境形状によって、人間の生存環境は大きく決定されていることがわかる。さらに大まかな天竜川環境の特性について述べておく。その地域一体が日本を南北に縦断する中央構造線に沿って、その西側に位置することの特徴は大きい。同

地域は領家編成帯に所属しているのだが、これらは1億5千年前ぐらいにできた地層である。それらは実は日本列島の中で、大陸と直接的に繋がっていた頃のユーラシアプレート東縁部の大地要素を含んでいるのである。それがその後大陸移動によって日本海を隔てて、日本の屋台骨の景観へと展開したのだった。その結果として天竜川の風景は、千年前関東班が日頃接している、おだやかな東日本の火山灰堆積地形とは異なった、規模の大きい破格なダイナミクスを持っていたように思う。諏訪大社の御柱文化などもこのような視点で考えてみたい。

今回学生指導を担当したのは、旧地名信濃国伊那郡小野牧で、現在の長野県辰野町小野、塩尻市北小野に比定された場所であった。その地域分析については学生報告に依るが、戦国期の領地争いの裁定によって神社が二つに分割され、小野町に属する矢彦神社と北小野町に属する小野神社とが併存している。その敷地は極めて類似しており、神社が二つに分割された自体が、過去の式年造替の制が母体になっていたことを物語っているように思う。



図2 Google マップ上の矢彦神社(左)、小野神社(右)の並列の様子。天竜川からの俯瞰視点。

いずれの神社もその境内の四隅に御柱が建てられ、この地の建築文化の奥深さに触

れることができた。

千年村 YouTube の検討

バイクは単独的な視点を持てるので、調査の様子も含め今回積極的に動画撮影を行った。YouTube のコンテンツでよく見られる Moto-vlog であり、地域の大地の感覚をよりダイナミックに味わえるのが

魅力である。疾走調査に参加する数十名規模の参加者の風景もうまくまとめて公開したいと思っている。これによって千年村の魅力をもっと別の角度から発信していけたらと思う。

今回のバイク装備
バイク HONDA GB350
カメラ INSTA360 X4

歴史の交差点 2024 年度長野県中部疾走調査

— 東京都市大学 福島加津也

1. 調査地について

昨年度から本格的に復活した千年村プロジェクトの疾走調査は、2024 年度に長野県の松本と伊那周辺を巡ることになった。そこには、東西を山脈に囲まれた盆地と奈良井川や天竜川による河岸段丘によって、低地の水田（写真 01）から台地の果樹園（写真 02）まで、平地と斜面地による多様な土地利用が見られた。



写真 01



写真 02

2. 担当郷について

私たちが担当した集落は、伊那谷の東側の山々の麓にある諏訪郡弓良郷である。小さな谷が山地に入り込む複雑な断面の地形と、山側から川が流れているため、集落から低地だけでなく高地にも田園が広がっていることが特徴だ。

私たちの眼を引いたのは、全国的に普及している農家の田の字プランと思われる民家（写真 03）と、信州地方に特有の本棟づくり（写真 04）など、いくつかの民家形式が混在していたことであった。小さな集落の場合、民家形式は基本的に一つであ

ることが多いので、とても印象に残っている。

また、母屋に隣接する土蔵が本格的な造りをしていながら、かなり大胆に改装されていたことも興味深かった。土壁を強い風雨から守るためにポリカーボネイトの波板で覆い、その間の半屋外空間を作業場や資材置き場に活用している（写真05）。また、入口に住宅用の引き違い戸を流用して、倉庫ではなく住空間として用いているような事例もあった（写真06）。山形や秋田などに多く見られる蔵を住空間とする居住形式が、この伊那谷にも流入しているのはなぜだろう。



写真 03



写真 04



写真 05



写真 06

3. 形式の混在

他の集落では、民家以外にも形式の混在を見ることになった。伊那郡入谷荘にある熱田神社は彩色された多くの彫刻で飾られているため、日光東照宮を連想して「伊那日光」と呼ばれている。寺社建築を象徴する大きな唐破風の拝殿と対比するように、本殿はさらに大きな農家風の茅葺屋根の覆屋の中にあり、その壁は貫だけで囲われている（写真07）。それは、宗教の形態という社会的な格式と、集落の技術という素朴な野生の混在と捉えることができる

かもしれない。

また、社殿の脇にある舞宮は、大きな屋根に橋掛かりのような廊下が左前方から斜めに貫入するダイナミックな空間構成（写真 08）であり、舞台は大きなスパンを飛ばした無柱空間となっている。それは、舞踏空間という伝統と構造技術という近代が混在しているように見える。



写真 07



写真 08

安曇郡前科郷にある鶴山四神社は、河岸段丘の上のきれいに整地された斜面地にくつつかの社殿が点在していた。そこに一般的な神社の境内というイメージは薄く、まるで大らかな公園のようであった。正面にある社殿は小さくとも本格的な神社形式を持ちながら、本殿の周りにはプラスチックの波板で即興的に覆われている（写真 09）。社殿の脇にある末社は、セルフビルドで作られたようなコンクリートブロックの上に、端正な意匠の木造建築が載っている（写真 10）。これらは、伝統的な寺社仏閣

の技術と現代的なブリコラージュの混在かもしれない。



写真 09



写真 10

筑摩郡錦服郷は、松本市の北側の山中に位置する小さな集落である。地図によると集落内の道路は行き止まりのように見えるが、実際に行ってみると山の中へとさらに続いていた。調べてみると、その道路はかつて江戸時代に松本藩の参勤交代に用いられた江戸街道で、松本と上田を結んで栄えていたという。集落の中にひととき大きな民家があった。それは、松本藩主が参勤交代で休憩する保福寺宿の本陣を務めた旧小澤家住宅（写真 11）で、現在ではハイクラスの宿泊施設として美しく保存活用されていた。突然の訪問にもかかわらず、内部をていねいに案内していただいたことに感謝したい。内部の三層吹き抜けの大空間と、その上に井桁に架かる梁と貫がすばらしい（写真 12）。そこには、タイムカプセルを開けたときのように、歴史の遺

産と現在の空間がつながって混在していた。

江戸街道は徒歩による重要な交通路であったが、自動車の走行には適さないため、周辺の地域は近代以降に冷凍保存されたような状況になっているのだろう。この周辺地域には、江戸街道の他にも中山道や善光寺街道、三州街道や東山道などの街道が通っていて、まるで街道のスクランブル交差点の様だ。現代の鉄道や自動車の交通からすると不便な山奥に見えるが、それは時代の変化でかつての賑わいがぐると反転してしまったからなのだ。このような現代からだけの視点では分からない歴史の流れを見て周り、現地で感じて記録に残すことは千年村プロジェクトの大切な役割の一つだ。



写真 11

町の記憶を残す千年村

表が町、裏が村

私はこれまで、どちらかというとも村ではなく、都市を研究してきたこともあって、千年村で時折出会う「町と村のあわい」に惹かれる。前回の琵琶湖湖東疾走調査でいえば、それは蒲生郡篠筈郷であった。古代は小規模な集落から構成されていたであろう地域が、中世には水上交通の利点から湊として発展し、さらには軍事の拠点となっ



写真 12

今回の調査地域である長野県中部には、人々が住まう多様な形式が混在していた。近代以前に多くの街道が重なり合う交通の重要拠点であったため、様々な文化や経済が流れ込んでいたことがその要因なのだろう。現代に交通の拠点という機能は失われているが、集落には今もなおかつての痕跡が残っている。その痕跡をどのように未来につなげていくか。今、私たちに問われている大切な課題だ。

— 東京大学 林憲吾

て、比較的規模の大きな町を抱えるようになる。その過程で、政治経済的な中心地が、信仰の中核だった場所から分離し、聖と俗の二つの中核が生まれる。大きな町を含む千年村候補地では、そのようなパターンがあるのではないかと考察するに至った。

他方、今回の長野県中部疾走調査では、篠筈郷とは全く異なる町と村の複合体に

出会った。筑摩郡大野庄（現在の松本市波田地区）である。ここは、町場とそこから離れた信仰の場が並存する篠笥郷のような意味での複合体ではなく、文字通り、町と村が同居したような集落構造をしている。まず、野帳に掲載された明治末の地図からして不思議である。扇状地の山裾に立地する上波田村、下波田村には民家が集まよるような雰囲気がある—2000年代に行われた修景事業の結果ではあるが（図2）。とはいえ、個別の建物を見れば、街道沿いの宿場町のように町家が並ぶわけではなく、広々とした庭付きの敷地に、本棟造の民家をはじめとする戸建ての住宅が、蔵や納屋などの付属屋とともに建つ。建物レベルでは町よりも村の要素が勝っている。しかし、

っているのを確認できるが、道路に沿って線状にほとんど途切れることなく広がっている（図1）。「町」的な要素が強い場合、道路に沿って線的に建物が展開しやすい。実際、上波田村の道—それは波多神社に至る参道である—に立ってみると、石畳の道路に瓦屋根の塀などで区切られた民家が敷地境界に立ち並ぶ姿は、武家の屋敷地のここがはっきりと農村だとわかるのは、その道を折れて、民家の裏側に回ったときである。そこには広大な田畑が広がっている（図3）。両側に民家が立ち並ぶ道が長くつながっているため、そこを歩いている間は、農地の存在を忘れてしまう。まさに「表が町、裏が村」というべき構造をしている。

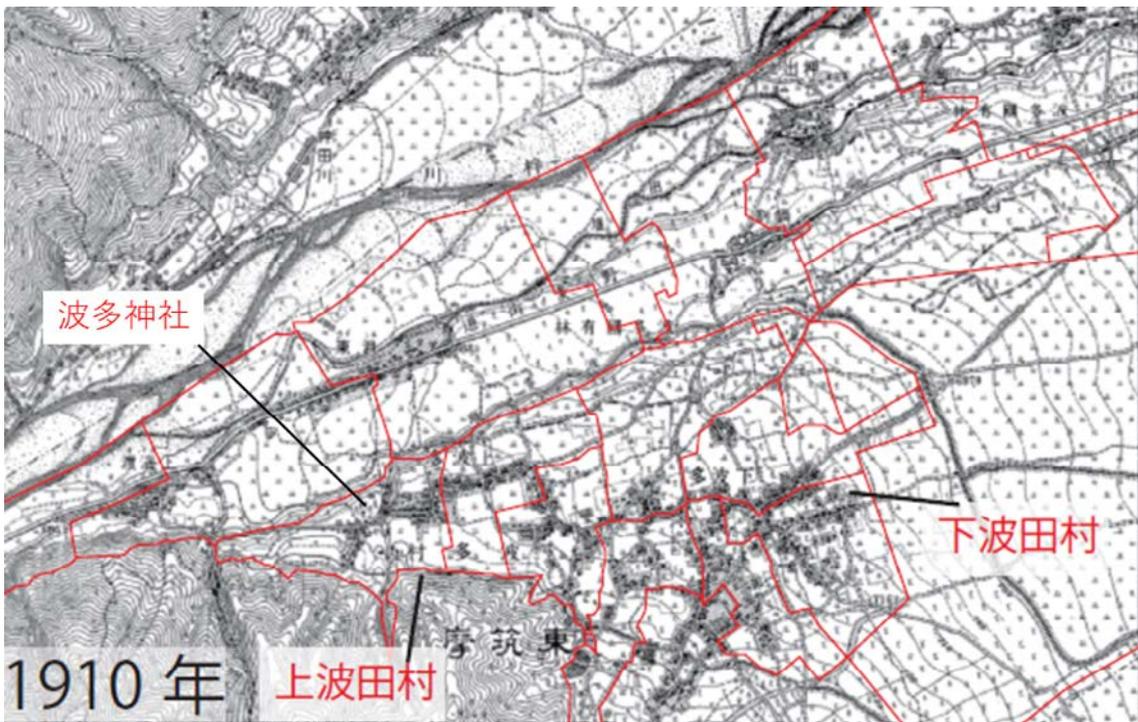


図2. 上波田の波多神社への参道（筆者撮影）



図1. 1910年の波田地区。民家が線状に広がる





図3. 参道沿いの民家の裏手に広がる農地
(筆者撮影)

町としての記憶

では、なぜこのような町と村が同居した構造をしているのか。住人に聞いて腑に落ちた。たしかにここはかつて町だったからだ。室町時代には城下町として、江戸時代には門前町として栄えたという。しかし、ここ上波田は、梓川が形成する河岸段丘の最上段の山裾に位置し、この地区の古くからの中核だったことは間違いないものの、逆にいえば、奥の奥、町的なものができるなら、もう少し低地に展開してもよさそうである。それでもここに町を呼び込む要因は何だったのか。

その答えも住人が教えてくれた。野麦街道である。集落の北側には梓川が流れている。その梓川に沿って、かつて鎌倉街道とも呼ばれた、飛騨と信濃を結ぶ野麦街道が走る。梓川は、ちょうどここから山地を抜けて東方面へと平野に出るが、それと反対の山地方面にこの街道を辿っていくと、岐阜県と長野県の県境に位置するこの街道の難所として知られる野麦峠に至り、それを越えると飛騨地方に入る。この街道は、古くから信濃と飛騨、さらに能登方面との間の人や物資の移動に欠かせない通りであった。明治には、飛騨から女性たちが過酷な野麦峠を越えて岡谷や諏訪の製糸工期には荒廃していたと考えられるが、その後再興され、江戸時代には広大な伽藍が整備され、「信濃日光」と称されるほど多くの人々が訪れる寺院となった(図4)。この寺院の門前町として上波田あたりは栄えたといわれる。つまり、信仰を集めている寺院に至る拠点になった。それにより、

場に女工として出稼ぎに行った史実が、山本茂美の小説『あゝ野麦峠』で描かれ、有名になった。調査で訪れた上波田は、この街道が山地から平野に至る転換点に位置する。信濃から飛騨方面に向かう入口、あるいは逆に飛騨方面からは長い山地の出口となる。そのため、ここには街道沿いの停留地になるポテンシャルがあったと考えられる。

平安時代には、早くも上波田が大野庄の統治の拠点になったことがうかがえる。波田地区文化財調査委員会が発行する『波田地区文化財マップ』によれば、平安遷都ごろ京都太秦の秦氏が、朝廷の御牧であった大野庄の牧司としてこの地に入り、のちに大野庄は秦氏の所領となり「畠郷」に変わる。12世紀頃には波多神社に熊野権現が勧進されたと伝わる。その後も上波田や下波田あたりは、この地域を管理・統治する拠点となったとみられ、室町期には波多神社近くの山頂に山城が築かれ、麓には城下町が形成された。しかし、戦国時代の城主波多数馬が武田氏に敗れたのち、1552年に山城と内城は破却された。

この山麓の集落が、町的な構造を強く残す要因はもう一つある。信仰である。波多山城が位置していた山の中腹には真言宗城下町が廃れた後には門前町として町の要素を残した。ここが飛騨との出入口にあたるとはいえ、交通の要所という点だけでは、町的な様相をここまで残さなかったかもしれない。

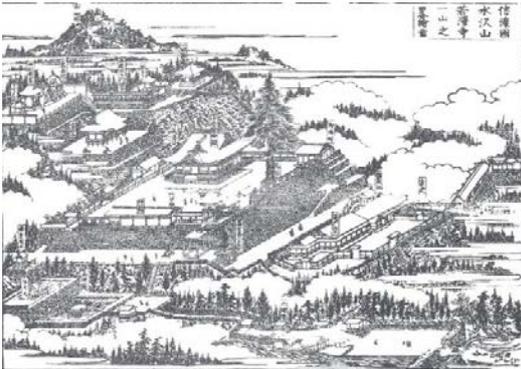


図4. 若澤寺一山之略絵図

近代以降の村化

以上が、この地区に町の要素が現れる背景だが、ではなぜ逆に町になりきらず、むしろいまでは村の要素が強いのか。その理由を最後に考えてみたい。

端的に言えば、町としてのポテンシャルが失われたからである。まず、信仰。松本藩は明治の廃仏毀釈に熱心だったといわれ、若澤寺もそれにともない廃寺となった。次に街道。野麦峠は、先に述べたとおり、明治には飛騨からの女工が信濃に向かう重要な道として機能していた。だが、1934年の高山本線の鉄道開通後はその役割を失い、飛騨から信濃へ歩くことはなくなった。また、自動車道としても、戦後に開通する中央自動車は伊那谷を抜けるルートを通り、交通需要は高くない。低地沿いの街道であれば、近代に入っても交通の往来が激しく、その周辺が住宅地などに呑み込まれていくケースにしばしば出会う。それ

に対して、山間部を抜けていく街道の場合、近代に入って交通需要が減少するケースも多く、その場合、町と村のパワーバランスでいえば、村に傾く。したがって、そのような条件を持った千年村の場合は、町と村の複合体の様相を呈する可能性は高くなる。今回の疾走調査で言えば、他に筑摩郡錦服郷もそのようなケースなのかもしれない。

このように波田地区では、信仰と街道の二つの要素があることで、ある時期に町としての性格が強めに現れ、近代以降にそれが弱まった後も、その記憶を残しながら、町と村の複合体のような特異な景観を生み出した、と考えられないだろうか。町の記憶を残す千年村というのも、千年村の一つのパターンに挙げられるだろう。

参考文献

波田地区文化財調査委員会『波田地区文化財マップ』波田地区文化財調査委員会、2017年

長野県波田町教育委員会『若澤寺跡～若澤寺跡調査報告書～』長野県波田町教育委員会、2005年

松本市文化財課「波田山城跡」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/soshiki/134/4007.html>

松本市文化財課「若澤寺跡」<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/soshiki/134/4015.html>

分割された小野神社と矢彦神社／藤島亥治郎の復元民家

— 滋賀県立大学 川井操

私達の6班は、東京都市大の杉浦くん、千葉大の猪野尾くん、SFCの芳賀さんの4人のグループ。初日に回ったのは、小野神社・矢彦神社とその周辺集落。2日目に回

ったのは、筑摩郡崇賀郷、筑摩郡大野庄、である。

最初に訪れたのは小野神社と矢彦神社だった。両神社は、隣り合う敷地に並列し

ていて、互いに御柱を持っている。信濃國二ノ宮とも呼ばれ、信濃國では一ノ宮の諏訪大社に続く神社である。小野神社は塩尻市北小野、矢彦神社は伊那郡辰野町大字小野に属している。周囲は塩尻市であるが矢彦神社は飛地のようなかたちで伊那郡辰野町に属している。両者は元々一つの神社（小野神社）であったが、戦国時代に松本藩と飯田藩の領地争いがあり、天正19年（1591）に豊臣秀吉の裁定（太閤裁き）により、小野盆地を流れる唐沢川を境に筑摩郡北小野村と伊那郡南小野村に分割されて、それによって神社の境内も分割された。小野神社は北小野、矢彦神社は南小野の飛地というかたちになった。市町村の統廃合が行われても、神社の敷地分割は当時の名残が残されたままである。敷地の裏側にある小中学校は辰野町塩尻市小学校組合立両小野中学校となって両エリアを跨いで運営されている。この場所は、初期の中山道と三州街道の結節点で交通の要衝でもあり、小野盆地を北に抜けると松本盆地、南に抜けると伊那盆地が広がり、両盆地をつなぐ臍のようにも見える。小野盆地は「枕草子」では「憑（たのめ）の里」と呼ばれた。その名前からして霊的な力を感じてしまう。敷地の裏側は大きな森で、針葉樹と広葉樹の150種類以上の混合林となっている。御柱は森に埋もれるように2社に備えられている。小野神社に関しては、御柱祭で使われる4本の柱は北小野地区の山林から切り出され、4つの山の谷から運び出される。御柱に使われる樹種は、小野神社はアカマツ、矢彦神社はモミの木である。両神社の建築形式について、拝殿での違いが面白い。両拝殿の正面妻について、

小野神社が1915年建立で切妻造の彫刻の装飾が少ないのに対し、矢彦神社は1782年建立で唐破風の華美な彫刻で飾られる。太閤裁きによる神社の分割の影響が、今日的にも、行政区画、学校運営、建築の形式や装飾、御柱にまで影響を与えていることが興味深い。



小野神社拝殿



矢彦神社拝殿

二日目は、私たちグループの調査対象地エリアにある平出遺跡と平出博物館を回った。平出遺跡は、松本盆地の南縁、奈良井川扇状地上に位置し、湧水源（平出の泉）に近接している。日本3大遺跡の一つに数えられ、縄文時代から平安時代まで続いた複合遺跡であり国の史跡に指定されている。平出の泉は、縄文～平安期の集落の水源となりその生活基盤を支えたが、隣接する山際の集落に流れる渋川の水源でもある。このあたりには大きな本棟造りの屋敷が何軒も残っている。伊夜彦神社や水路の分水点、水源近くの広場には道祖神や庚

申塔が祀られている。



地蔵広場にある道祖神

平出博物館の庭先には、平出遺跡から移築された古墳時代の原始寄棟造の復元民家がある。昭和26年(1951)の建築史家・藤島亥治郎による復元であり、以降の古墳時代の復元民家のモデルとなったものである。この復元家屋に見惚れてしまった。茅葺き民家の屋根部分そのまま住居になったように見える。入り口は端部を捲り上げた不思議な形でこれまで目にしたことがないものだった。屋内にある4本の柱

で主構造をつくっているのだが、その柱部分が伸びて壁を形成し後の民家の基本型になっていったことがよくわかる。多分に藤島の創造的な復元である部分も大きいのだろうが、その佇まいにモノの力強さを感じた。



藤島亥治郎による古墳時代の復元民

疾走調査を「小盆地宇宙」論からふりかえる

— ものつくり大学 土居浩

はじめに

松本駅で集合・解散し、宿泊先が伊那市内となった今回の疾走調査は、長野県の松本盆地と伊那盆地を行き来する行程となった。私が配属された班では、ほぼ高速道路を使わず一般道(いわゆる下道)で移動したことで、これまでの平野部を中心に巡回してきた疾走調査では気にしていなかった候補地と候補地の距離感を、時間的だけでなく景観的にも隔絶された体感として得た。このような、景観的に隔絶された(いわば別世界へと移動する)感覚は、関東平野を移動しながら体感することは、まずない。おそらく2023年度の湖東平野に

おける疾走調査も、私自身は参加できなかったものの、関東平野の移動と同感覚だったのではないかと推定している。

今回この小稿では、この「別世界へと移動する」と表現する時の「世界」について、取り上げてみたい。具体的には、米山俊直(1930-2006)が提唱した「小盆地宇宙」の議論と、千年村プロジェクトとの接続可能性の検討である。まずは長野県の地形について、次いで「小盆地宇宙」の議論についての概観を踏まえ、狭間(境界)への注目をうながすことで、その務めを果たしたい。

長野県の地形

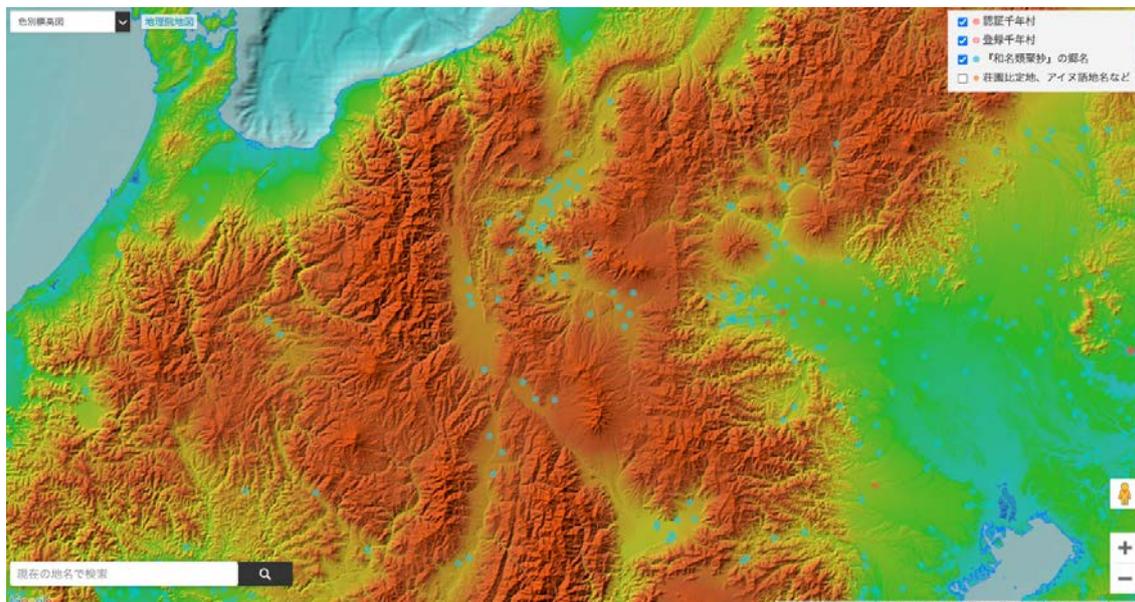


図 1

長野県の千年村候補地（『和名類聚抄』の郷名）を、千年村マップで色別標高図と重ねて眺めると、黄から赤へと遷移する色合いの地に『和名類聚抄』の郷名が点在していると読み取れる（図1）。長野県とは関東山地を挟んで隣り合う、関東平野に点在する候補地の背景色（緑）と比べると違いは一目瞭然で、そもそも前提とする地形環境が大いに異なる。「日本の屋根」とも呼ばれる長野県は、本州のほぼ中央に位置するいわゆる海なし県で、◎◎アルプスの別称を持つ飛騨山脈・木曾山脈・赤石山脈を筆頭に、急峻な山岳や高原地帯が多い。この長野県で千年村候補地は、盆地に分布している。

長野県を代表する盆地は、県内の地域区分との対応で把握することができる。長野県はその面積が広く（北海道、岩手県、福島県に次ぐ広さ）、しばしば県内を四つに区分して紹介される。すなわち、北信・東信・中信・南信の四地方である。北信は長

野盆地、東信は佐久盆地、中信は松本盆地、南信は伊那盆地が、各地方を代表する盆地となる。なお、諏訪湖周辺に広がる諏訪盆地は南信地方に分類されており、これは諏訪湖が天竜川水系の一部として扱われることにも深く関連している。

今回の疾走調査は、地形的には松本盆地と伊那盆地の行き来であり、同時に中信地方と南信地方との行き来でもあった。自然環境である地形（盆地）と、人為的区分である地方（県内の地域区分）とは、基本的に別レイヤーであるが、重なり合い一つの統合体として見立てることができると、それを地域単位としての「世界」として把握することが可能となる第一歩となるだろう。そのような見立ての先駆として、米山による「小盆地宇宙」の議論を位置づけることができる。

小盆地宇宙

米山自身の回顧[米山 1989]によれば、

米山が「小盆地宇宙」をキーワードとして文章をまとめた発端は、日本生活学会の論文集だった。そのタイトルにある「文化の場」[米山 1987]の文化とは、「文化人」等々が含意する「文化」ではなく、いわゆる生活全般を指す文化のことで、米山の専攻である文化人類学が論じる文化である。この「文化の場」以外にも米山は、小盆地宇宙について「文化領域」や「地域単位としての世界」あるいは「社会文化統合のレベル」など様々に表現している。

小盆地宇宙に関する米山の単著題目が『小盆地宇宙と日本文化』[米山 1989]と示されたように、基本的に日本文化論の一種として構想されており、その当時の日本文化論への批判的視座が含まれていた。同書は米山によれば、小盆地宇宙というイメージを出発点とする、日本文化の単一性という「神話」に対する反措定の試みであり、当時の日本国内外に溢れる日本文化一元説への修正を試みた書であった。念のため付言しておけば、米山自身は複数の論考において「小盆地宇宙」をあくまでキーワードとして用いており、わざわざ「論」を付して「小盆地宇宙論」としては取り上げていない。確かに『小盆地宇宙と日本文化』を読み直しても、むしろ「論」とすることを周到に回避しているようにすらみえる。しかし『小盆地宇宙と日本文化』の構想そのものは世界的視野であり、議論の後半では小盆地宇宙と対立する概念として平野宇宙を想定し、雲南省など中国西南部への訪問経験を踏まえつつ、小盆地宇宙と平野宇宙の対比が、日本文化以外にも適用する可能性を示唆している。

ともあれ米山の見立てによれば、「近代

日本の統合がすすめられる前には、日本列島におよそ百を数える地方的な社会文化的な統合があった。それはいわば、日本列島の文化の単位であった」のであり、これが「小盆地宇宙」である [米山 1989]。その具体的イメージを、引用で確認したい。

>>

「小盆地宇宙」は典型的には、盆地の中心に領主の居住地と、その城下町があり、そこにひと、もの、情報の交流がある。その町場の周囲には水田を主とする農地がひろがっている。盆地底には川があるがそれは四周の山からの水を集めていて、その川は七方から盆地に流れこみ、一方へ流れ出るのである。丘を分けて川は上流につながり、沢の溪流となり、その沢をつめると高い山岳部に達する。別の言葉でいうと、盆地は周囲の山々の分水嶺で取囲まれているわけである。小盆地宇宙というと盆地底だけを考えやすいが、私はこの周囲の山岳部までを含めてひとつの統合体と考えている。したがってこの宇宙には、町場の市場、流通機能に代表される商工業者、農村部の農民、山岳部の狩猟採集の伝統を含んでいるのである。

<<

引用序盤から中盤にかけては、千年村プロジェクトが蓄積してきた知見に照らしても、さほど違和感はない描写と判断される。中でも、盆地底から周囲の山岳部までを含め、市場や流通機能も含む「ひとつの統合体」としての見立ては、「環境」はもちろん「交通」にも着目してきた千年村プロジェクトと響き合うだろう。

米山が『小盆地宇宙と日本文化』で取り上げている盆地の具体的事例は、奈良・亀岡・篠山・綾部・福知山・峰山という関西エリアの盆地である。それ以外に取り上げ論じているのは、「小盆地宇宙のモデル」としての遠野盆地である。米山が取り上げた盆地は、すべて城と城下町を持っており、地域文化の拠点としての小盆地であった。

その点、今回の疾走調査でめぐった複数の盆地には大小の別があり、比較的大きな広さを持つ松本盆地や伊那盆地に近接し、それらの衛星都市ならぬ衛星盆地とでも呼ぶべき盆地も観察できた。その具体的事例として、次節では小野盆地を検討したい。

狭間（境界）への注目

小野盆地は、今回の疾走調査野帖で「01 伊那郡小野牧(荘園)」として取り上げた、辰野町小野・塩尻市北小野が含まれる小盆地で、北の松本盆地と南の伊那盆地とをつなぐ道沿いに位置する。小野盆地の 3km ほど北に善知鳥峠という分水嶺があるので、地形的にみれば（松本盆地のある）中信ではなく、（伊那盆地のある）南信といえる。

この地の特徴的景観は、小野神社と矢彦神社である。二社が同一の社叢内に隣接しており、元々一つの神社であったものが戦国時代に分割されたことは、すでに今回の野帖作成者（北澤宏太郎氏）が記述しているところである。千年村プロジェクトとしては、ここに生産・生活・生存の痕跡を探し回るところだが、まずはここが境界であることを、現在もなお強調し続けている現場であることを、再確認しておきたい。その第一歩は、隣接しているが故にあえて異

なる設えを施したと思われる二社の景観を想起することだろう。

小野神社と矢彦神社に象徴されるこの地は、かつての戦国時代における領地争いを発端として、現在は塩尻市と辰野町との狭間のみならず、広域連合においても狭間となっている。広域連合とは、都道府県や市町村など複数の地方公共団体が、行政サービスの一部を共同で取り組むための特別地方公共団体で、長野県には 10 の広域連合がある。塩尻市は松本広域連合（松本市・塩尻市・安曇野市・麻績村・生坂村・山形村・朝日村・筑北村）の、辰野町は上伊那広域連合（伊那市・駒ヶ根市・辰野町・箕輪町・飯島町・南箕輪村・中川村・宮田村）の、それぞれを構成する一員となっており、これまた別の組織に所属していることになる。

米山のいう「小盆地宇宙」とは、あくまで「ひとつの統合体」として見立てることが可能な場合であるから、具体的地形としての盆地 X における生産・生活あるいは生存の仕方が、広義における「ひとつの統合体」としてみなすことが無理であれば、その盆地 X を「小盆地宇宙」とは呼べない。しかしその盆地は、近隣の比較的大きな盆地 Y を中核とする「小盆地宇宙」を構成するひとつとして、盆地 X を位置づける可能性はあるだろう。その逆に、その盆地 X の中で、X-a なり X-b なりのさらに小地域へと分割され、それぞれが「ひとつの統合体」としてみなしうるならば、X-a や X-b それぞれを「小盆地宇宙」と呼ぶことは（用語として多少の混乱は生じそうではあるが）妥当だろう。実際、小野神社と矢彦神社は、それぞれの参道が伸びる方向とその門前

町との集落構造において、X-a や X-b としての「ひとつの統合体」の残り香のような状況は、かろうじて観察しえた。

ここまでみてきたように、小野盆地は地形的にひとつのまとまりをみせるが、行政的には(少なくとも戦国時代以降)分割されてきた歴史に、現在もなお影響を受けているといえる。それは、行政的な分割が無理を生じさせたことを反省して設立された、現代の広域連合にも今なお影響を与え続けている。これを裏返すと、地形的にはとてもひとつにまとめられないが、行政的にはひとつに集約させられた状況を指すだろう。千年村プロジェクト的な見地からすれば、この状況に陥った両者ともに「理に適っていない」として批判の対象となるだろう。それでもなお、小野神社と矢彦神社とが共に併存している現状には、地形的にひとつのまとまりを、行政的に無理に分割してきた歴史の中で、巧くやりくりする方法を見出して受け継いできたのだと思われる。残念ながら今回の疾走調査では、「巧くやりくりする方法」を発見するまでに至らなかったが、将来的に類似の事例に遭遇した際には、一見すると「理に適っていない」と思える中で、なぜ現在なおそこにあるのかと問い直す姿勢が求められる。

おわりに

先に引用した『小盆地宇宙と日本文化』

の一節には、続きがある。「小盆地宇宙」を盆地底から山岳部までを含めた「ひとつの統合体と考えている」こと、「したがってこの宇宙には、町場の市場、流通機能に代表される商工業者、農村部の農民、山岳部の狩猟採集の伝統を含んでいるのである」と総括した直後に続く一文である。

>>

いわば、弥生以降の農耕社会の伝統に加えて、縄文以来の狩猟採集社会の伝統も継承している宇宙である、とあってよい。

<<

直前まで同意できていたのに、この部分になって、首肯するのに少々躊躇するであろう。千年村プロジェクトはその出発点に『和名類聚抄』を置き、それ以前の時代に遡ることは、考古学的発掘事例を傍証とすること以外に稀だからである。この相違点については、「小盆地宇宙」の議論がなされた同時代における日本文化論の潮流を押しやる必要があるのだが、この点は他日を期したい。

文献

米山俊直 1989『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店

米山俊直 1987「文化の場としての小盆地宇宙」『生活学 第四冊』ドメス出版

伊那谷・松本盆地疾走調査報告 -クラのある暮らし、棟向きの変化-

— 田熊隆樹

疾走調査で集落を見るときに、いつも建

物や道の形・配置などの「集落構造」から

何かを考察することを心がけている。疾走調査の報告は詳細で正しい報告というよりは、今後詳細調査がなされる場合の踏み台、視点を与える存在だと思っているので、今回もいくつかの所感としていくつか記録しておきたい。

「冬の家」はクラにあったか

かつて新疆ウイグル自治区トルファンというオアシス都市で見た家の話からはじめる。標高が低く砂漠地帯であるがゆえの夏と冬の気温差（その差は50度ほどになる）に対応するため、ウイグル人の家はひとつの屋敷内に「明るく開放的な空間」（中庭にベッドを置き、ブドウ棚で影を作ったリビングルーム。夜もここで寝る）と「暗く温かい空間」（レンガで囲われ、小さな窓のみを持つ、冬にみんなで縮こまって過ごすリビングルーム）を両方持つ。彼らは2つの家を持ち、季節とともに過ごす場所を変えることで厳しい気温差に対応しているのがあった。また韓国の伝統的な民家でも開放的な夏の部屋とオンドル＋紙貼りで暖かく密閉した冬の部屋が存在するし、台湾の離島の原住民タオ族の家も、海を見渡す開放的な涼台と厳しい海風を防ぐための半地下の家がセットで作られることが常だった。

このように少なくともアジアでは、ひとつの家の中で夏と冬を攻略するのではなく、ちがう造りの家＝「2つの家」を持つことで厳しい環境へ対応するという知恵がある。

一方で僕は、日本の民家は上記のようなはっきりと構法の違う「2つの家」を持ってこなかったのではないかと考えていた。

日本の民家の中で分棟（母屋と台所を離して火災を防ぐなど）を持っていたのは南方や九州の民家だけである。そのかわり、世界に類を見ないほど移動・模様替え可能な建具を発展させてきたのだと理解していた。

しかし今回伊那谷の集落を見て、民家の脇にたくさん残る「クラ」がもしかしたら日本の「もうひとつの家」だったのではないかと思った。クラは、基本的には土壁で覆われほとんど開口を持たない、倉庫として使われるビルディングタイプであるが、この地方ではクラを「冬の家」として使っているのではないかと思わせるシーンに幾度も遭遇した。

たとえば、クラにアルミサッシが嵌められ、ベランダが張り出している。あるいはクラにくっつく形で2連の掃き出し窓を持つ部屋が二階部分に増築され、クラと屋根を共有している。これは、クラに住んでいるとしか思えない光景だった。厚い土の塗られた断熱性の高い空間を、居住空間として使用しているのではないか。少なくとも関東や関西の調査で訪れた集落では見たことのない光景であり、アジア的な知恵の蓄積を感じるとともに、もしかしたらこれが伊那谷地方の特徴でもあるのかもしれないと感じた。諏訪地方の「建てぐるみ」という、クラと母屋が一体的に作られる構法は有名だが、それはよく出入りの便のためと解説される。そこに「冬の家」としてのクラの存在を考慮すると、実はもっとダイナミックで、日本的な住み方の幅を広げる自由な暮らしがこの谷間にはあったのではないかと想像できる。そしてどうやらそれは、2025年現在までも残る生活スタ

イルなのだ。



図1：ベランダとアルミサッシを持つ窓

図4：クラ造りの母屋もあった



図5：クラは当たり前のようにたくさん残る



図2：クラにくっついた掃き出し窓を持つ増築2階



図6：茅葺民家とセットのようなクラ



図3：蚕小屋としてクラを使う例。中を見せてもらった



クラが壊され家が立つ

一方でこの地方ではクラは日常的な存在で、特別視されているわけでもなさそうだ。クラは基本的に屋敷内の母屋の近くに建てられているが、たとえば[08 安曇郡高家郷]で話を聞いた住人によると、クラを壊して新たな家を建てる流れがあるという。農作業をしていたお母さん曰く「かつてはもっと都会に行って新しい土地を買う余裕が若者にもあったけど、最近はお金もないし実家に戻って建てる人が多くなってきたね」とのことである。日本経済の停滞は、若者の村への回帰を促している面もあるのかもしれない。そうして新しく家が建つときは、元々あるクラや不要になったその他小屋などの建て替えとして進行することが多いのだ。それは逆に言えば、

クラを持っていたこと＝敷地の余裕が、息子の回帰を受け入れているとも捉えられる。生業の変化から農作業や貯蔵機能が不要になったことに加え、断熱性能の向上した昨今の家では、＜冬の家＞としてのクラの必要性も相対的に低下したと言えるのかもしれない。

伊那谷の棟向きと、住宅産業の棟向き

集落の新しい家を観察すると、古い母屋とは棟の方向が90度違っている例が多く見られた。調査に参加された信州大学の上原先生によれば、南北に広がった谷である伊那谷では、南北方向に強風が吹くため、風圧を直接受けるのを避けるために南北に棟を向けることが常だったという（面積の小さい家屋の妻側で風を受けることになる）。一方、近代以降の住宅産業が作り出す住宅では、南向きに大きな開口を持つ家がプロトタイプとして作られるため、こうした伊那谷の環境をなかば無視するかたちで棟を東西に向けて建つことになる。ここに、環境を読み込んだ伝統に支えられた民家と、商品として買う現代の民家の大きな違いが現れている。環境への合理性としては南北の棟向きが適しているが、産業的な合理性（日本の住宅のマジョリティとしての南向き）では東西の棟向きが採用されるのだ。

千年村調査で見てきた多くの集落の民家はそもそも南向きに建てられるものが多い印象だが、伊那谷のように大きな方向性を持った環境の下では、新しい住宅との違いがあらわになることがわかった。これ

は、集落構造の変化と言えるかもしれない。あたらしい集落構造は、伊那谷の強風に対しては非合理ではあるだろうが、考え方によっては、新しい南向きの家によってできた新たな集落構造は、この地の集落独特の配置を発展させていくかもしれない。ここに、集落評価の新しい視点を発見したような気がする。

以前の疾走調査では「屋敷内の家が更新されている」ことが、集落の持続に関する重要な指標のひとつであった。今後はそれから一步踏み込んで、新しい家と古い家の向きなどの構成を読み込み、その地のキャラクターを掴むきっかけとしていければと思う。



図7：古い家と棟方向を90度変えた新しい家



図8：新しい家では南向きの庭を確保している。新たな集落構造の兆しでもあるかもしれない

穂高矢原地区の倉について

— 小林千尋

はじめに

今回の疾走調査は2日目の途中から合流したため、きちんと歩けたのは安曇野郡八原郷（比定地：安曇野市穂高矢原）のみであった。限られた時間であったが、穂高矢原地区を歩きながら特に印象的だったことについて記したい。

諏訪地方の倉の特徴（ダシとたてぐるみ）

大場修編著『付属屋と小屋の建築誌 もうひとつの民家の系譜』（鹿島出版会、2024）では、諏訪地方の土蔵の特徴として「ダシ」と「たてぐるみ」が紹介されている。土蔵の切妻屋根の軒が出っ張った部分がダシと呼ばれ、妻面には「へ」の字の独特のシルエットができる。また「たてぐるみ」は倉を抱きかかえるような家造りで、敷地条件（土地の狭さ）と防寒対策から諏訪地方で独自に広がったという。

今回の調査で歩いた穂高矢原地区にも倉が数多く見られた。それらには「ダシ」や「たてぐるみ」はなかったが、両者と似ている特徴がいくつか確認できた。

特徴1) 下屋

穂高矢原で見た倉は例外なく下屋を持っていた。ダシのように軒が出っ張るのではなく、切妻屋根の一段下に下屋が作られている（図1）。半屋外空間ではあるが、片側が壁で、片側が柱となっている（図2）。日射対策や防風の観点からだろうか。畑に面するところでは土壁の倉が多く、通りに

面するところでは下部1.5m程度が海鼠壁の倉がよく見られた（図3、図4）。



図1 穂高矢原地区でよく見た土蔵。いずれも下屋をもつ。



図2 片側が壁で、片側がオープンな半屋外空間の下屋が多く見られた。



図3 地面から1.5m程度まで海鼠壁の倉。アルミサッシとシャッター付。



図4 多くの倉で、母屋側に下屋があった。

特徴2) 「母屋・倉・道路」の配置

配置は、「母屋・倉・道路」となっているケースがよく見られた(図5)。そのため倉がその家のファサードとなり、歩いているとまず倉が視界に入る。家の顔が倉である、ということは、地域に住む人にとって、倉はなにかしら象徴性のようなものを帯びるのではないかと想像した。また下屋は母屋側に向けて作られているものが多く、母屋と倉の距離が近い(図6)。この近さは、たてぐるみの背景である敷地の狭さや防寒対策とも関連(コンパクトな動線の利便性が優先された)があるのではないかと考えた。なんとというか、ギュッとしているのだ。



図5 道路-倉-母屋の配置をとるため、倉がその家の顔となる。



図6 アルミサッシのついた倉も複数見られた。どう利用しているのだろうか。

特徴3) 倉だけではない

畑の角で見つけたほこらの屋根も軒が伸びていて、下屋のように見えた(図7)。また新築工事中の住宅にも下屋があり、そのプロポーションは倉のそれによく似ていた(図8)。想像の域を出ないが、倉のかたちが無意識的に地域の建築の形に大きく影響を与えているように感じられた。



図7 畑の角にあった祠もどことなく下屋を感じさせる。



図8 新築住宅にも下屋があり、プロポーションも倉

第5章 付記

■教員・調査協力者

中谷礼仁(歴史工学/早稲田大学教授)

木下剛(造園学/千葉大学大学院教授)

石川初(環境情報学/慶應義塾大学大学院教授)

福島加津也(建築家/東京都市大学教授)

林憲吾(東京大学生産技術研究所准教授)

川井操(滋賀県立大学准教授)

土居浩(ものづくり大学教授)

田熊隆樹(早稲田大学 中谷礼仁研究室 OB)

松木直人(早稲田大学 中谷礼仁研究室 OB)

金盛晋也(千葉大学 木下剛研究室 OB)

近藤真(千葉大学 木下剛研究室 OB)

高橋大樹(千葉大学 木下剛研究室 OB)

■学生

【早稲田大学】

呉雄仁・碓井颯・北澤宏太郎・小谷さくら・Beatrice Sonia Ferlisan・安藤優花

【千葉大学】

酒田祥佳・寺村安也乃・苗奕暄・猪野尾ククル・菰田千絵・齊藤優介・望月理穂

【慶應義塾大学】

飛川優・原田馨子・羽賀優希・茂木真琴・佐藤歩貴

【東京都市大学】

五十嵐翔輝・倉田萌花・杉浦康晟・谷々芽生・大橋侑莉・池田公輔・葛蘊凝・鈴木茉那美

【東京大学】

中村莉緒・帳心璇

【滋賀県立大学】

上紺屋佑真・小幡笑鈴・小林翔生・西岡直美・折野このか・渡邊彩椰

【立正大学】

奥村敦至

5-1 謝辞

伊那谷・松本盆地を疾走調査するにあたり、調査対象地である 11 か所の集落とその周辺の地域にお住まいの方々には大変お世話になりました。心より感謝いたします。

5-2. 巻末資料

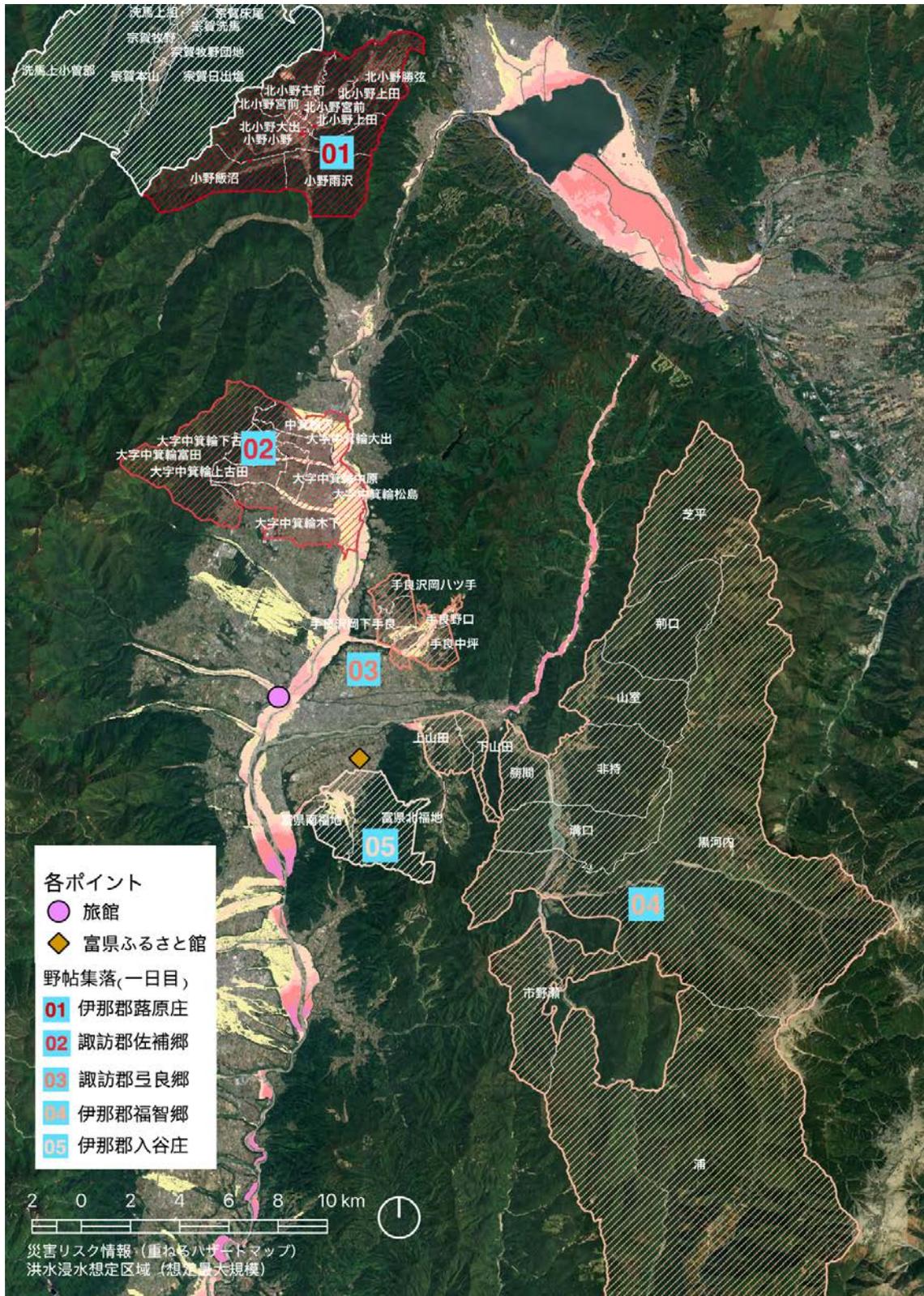


図1 野帖番号01-05 災害リスク情報図(碓井颯作成)

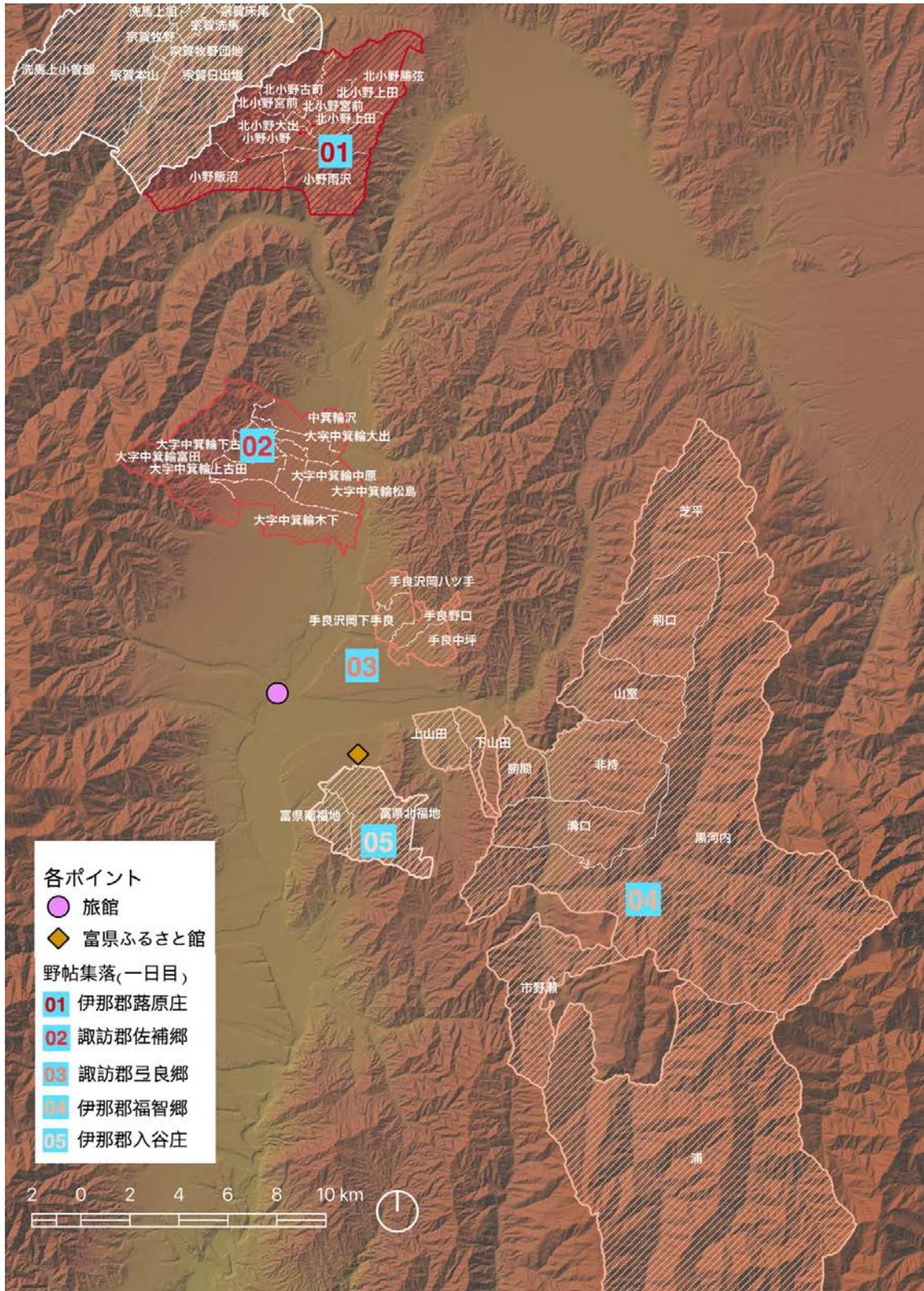


図2 野帖番号 01-05 地形図 (碓井颯作成)

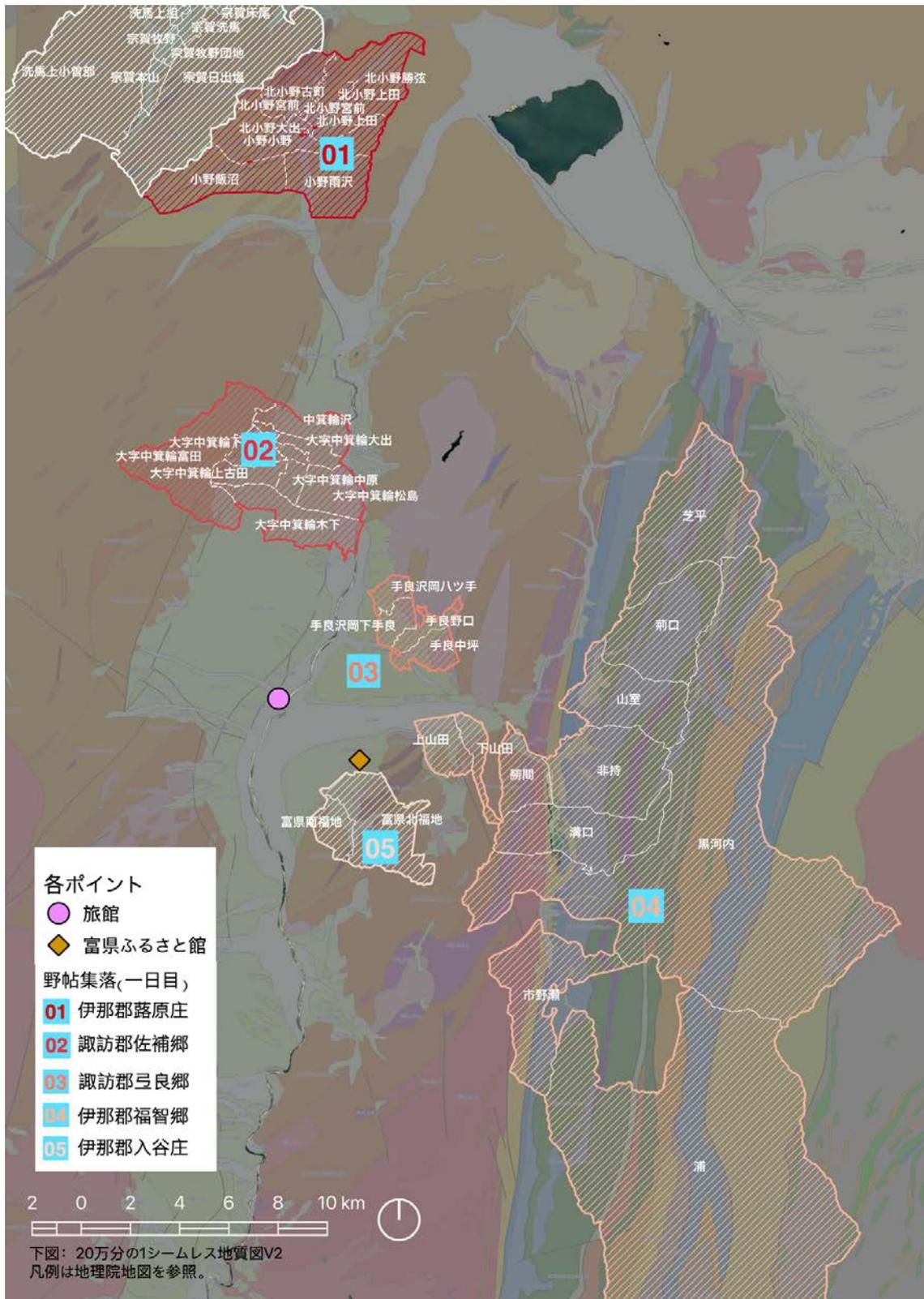


図3 野帖番号01-05 地質図(碓井颯作成)

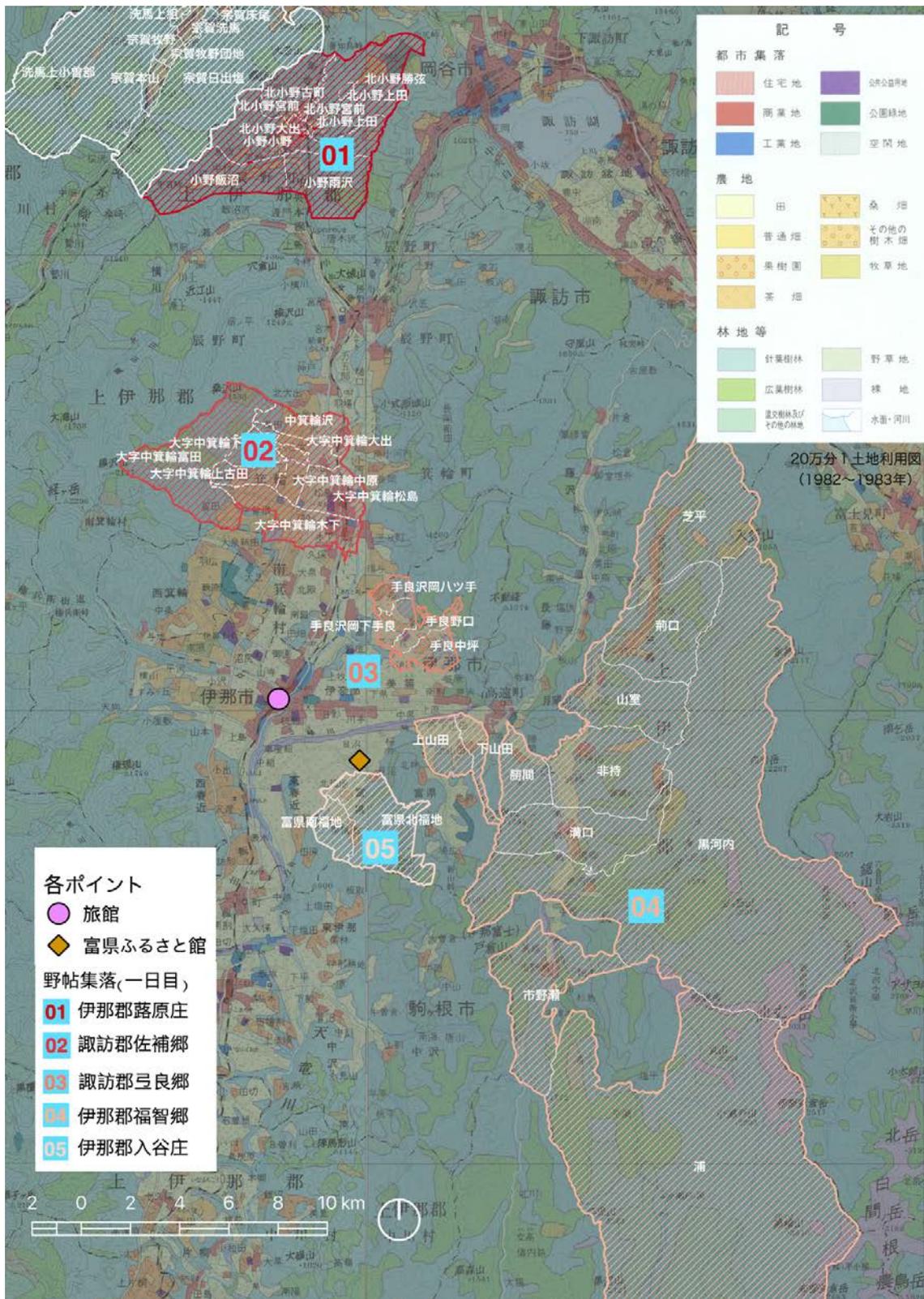


图4 野帖番号01-05 土地利用図(碓井颯作成)

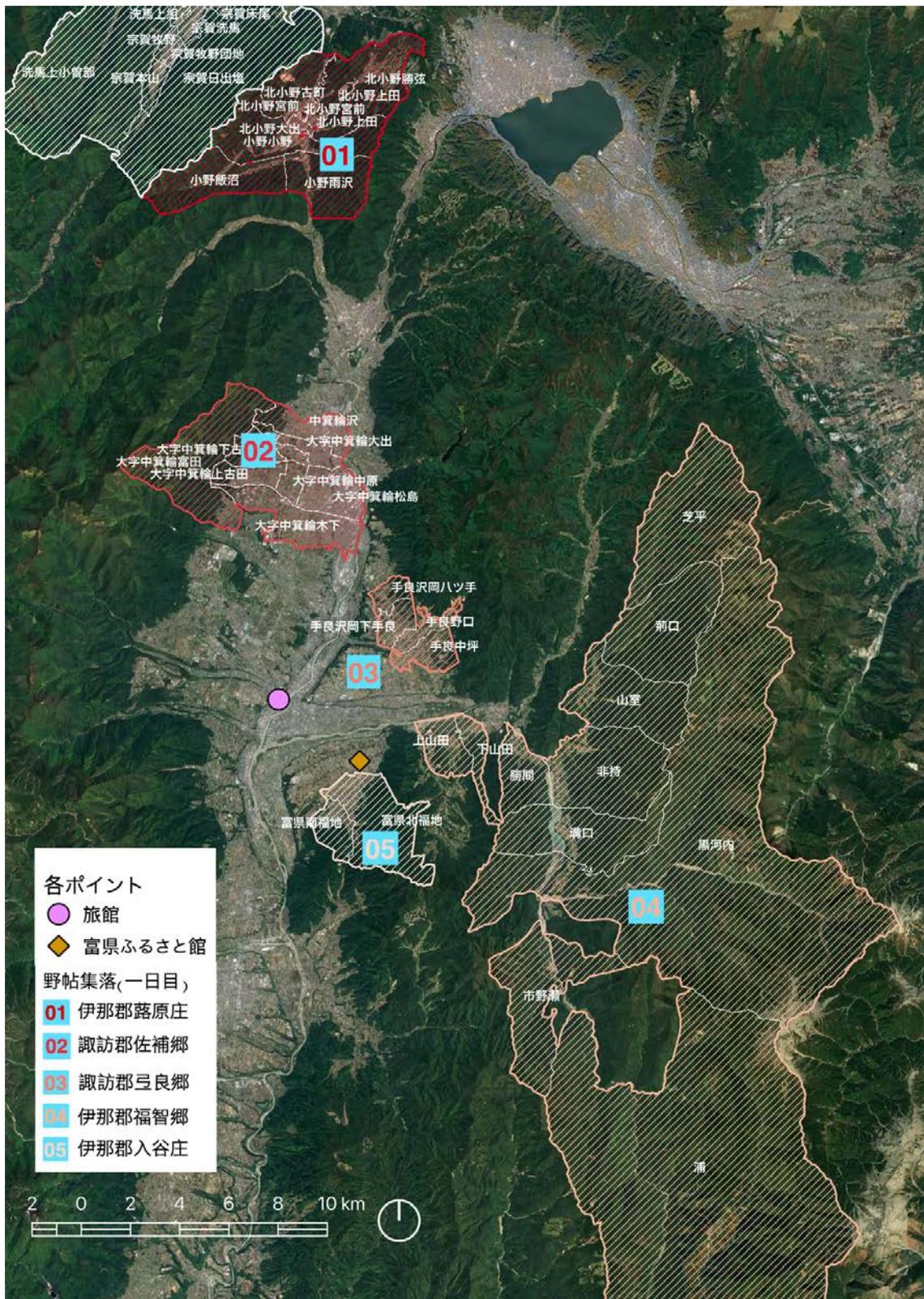


图5 野帖番号 01-05 航空写真 (碓井颯作成)

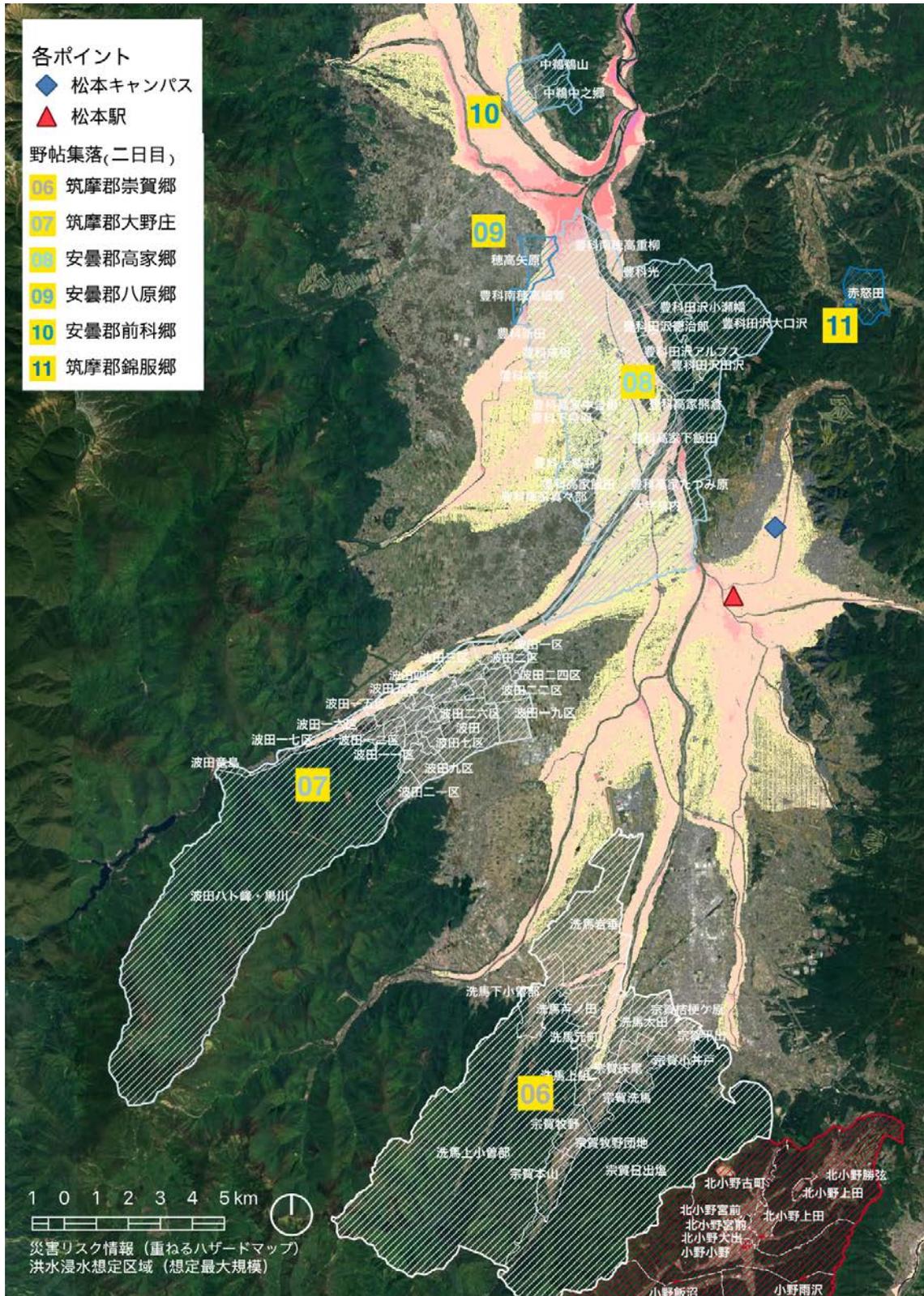


図6 野帖番号 06-11 災害リスク情報図 (碓井颯作成)

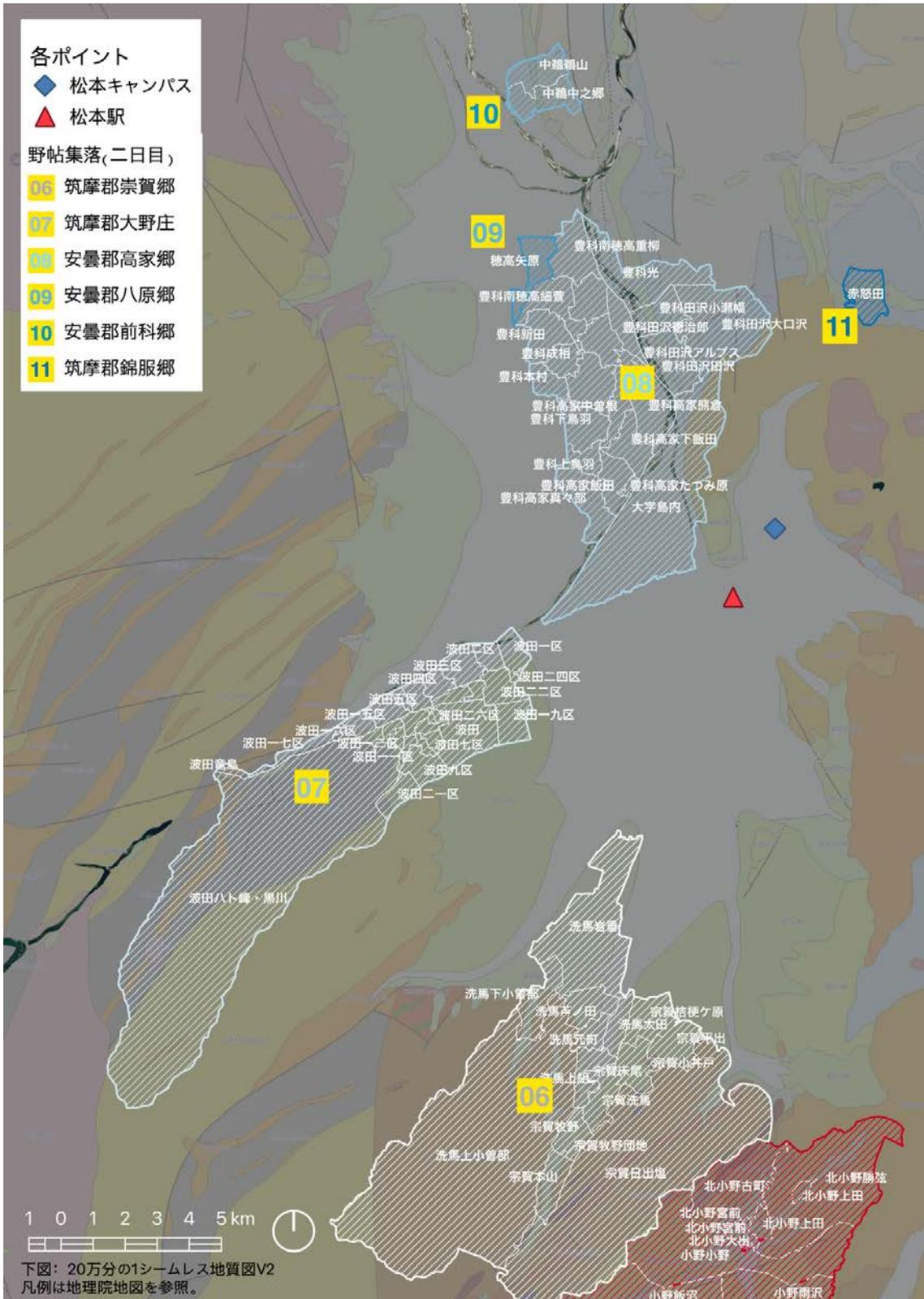


図8 野帖番号06-11 地質図(碓井颯作成)

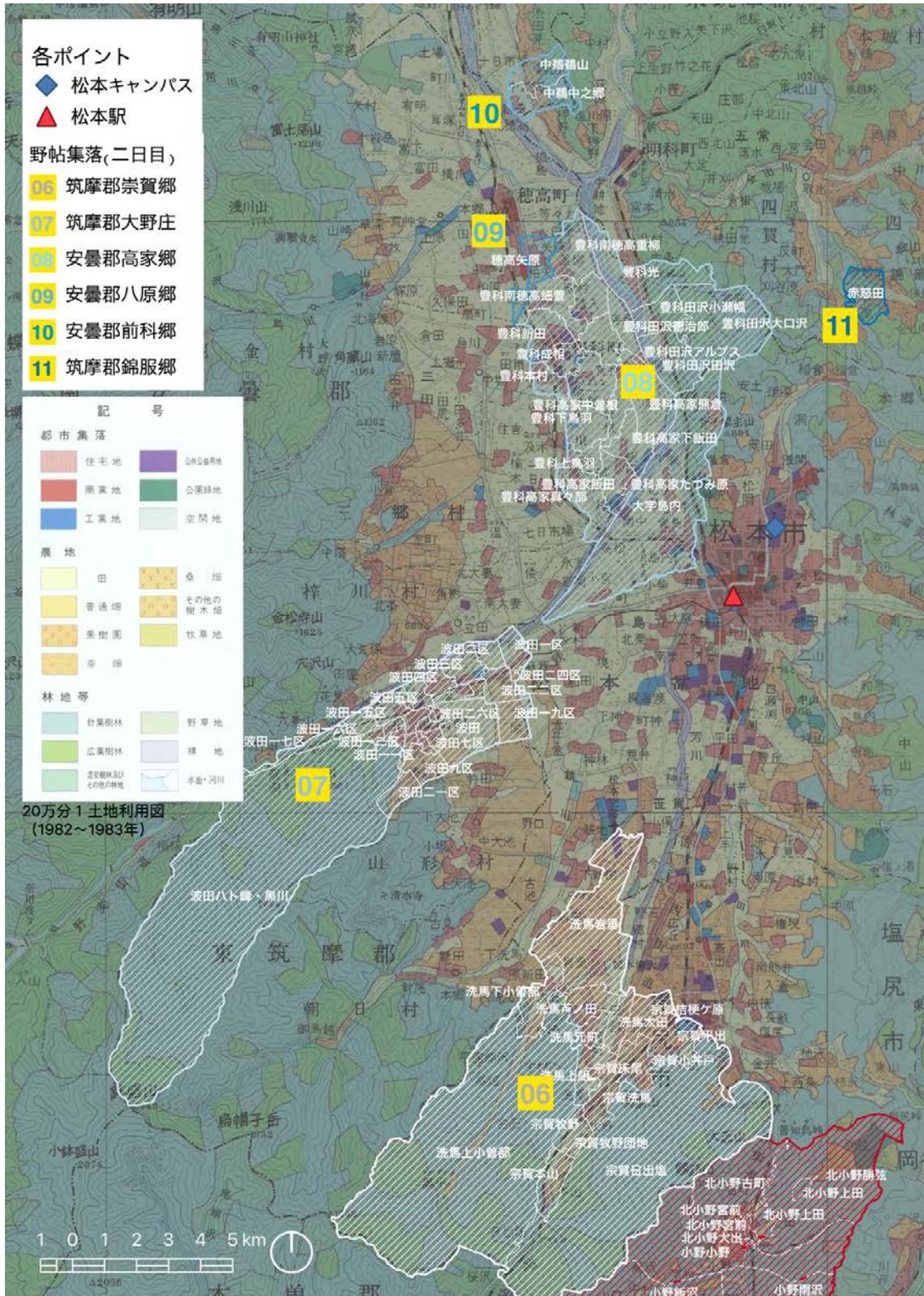


図9 野帖番号06-11 土地利用図(碓井颯作成)

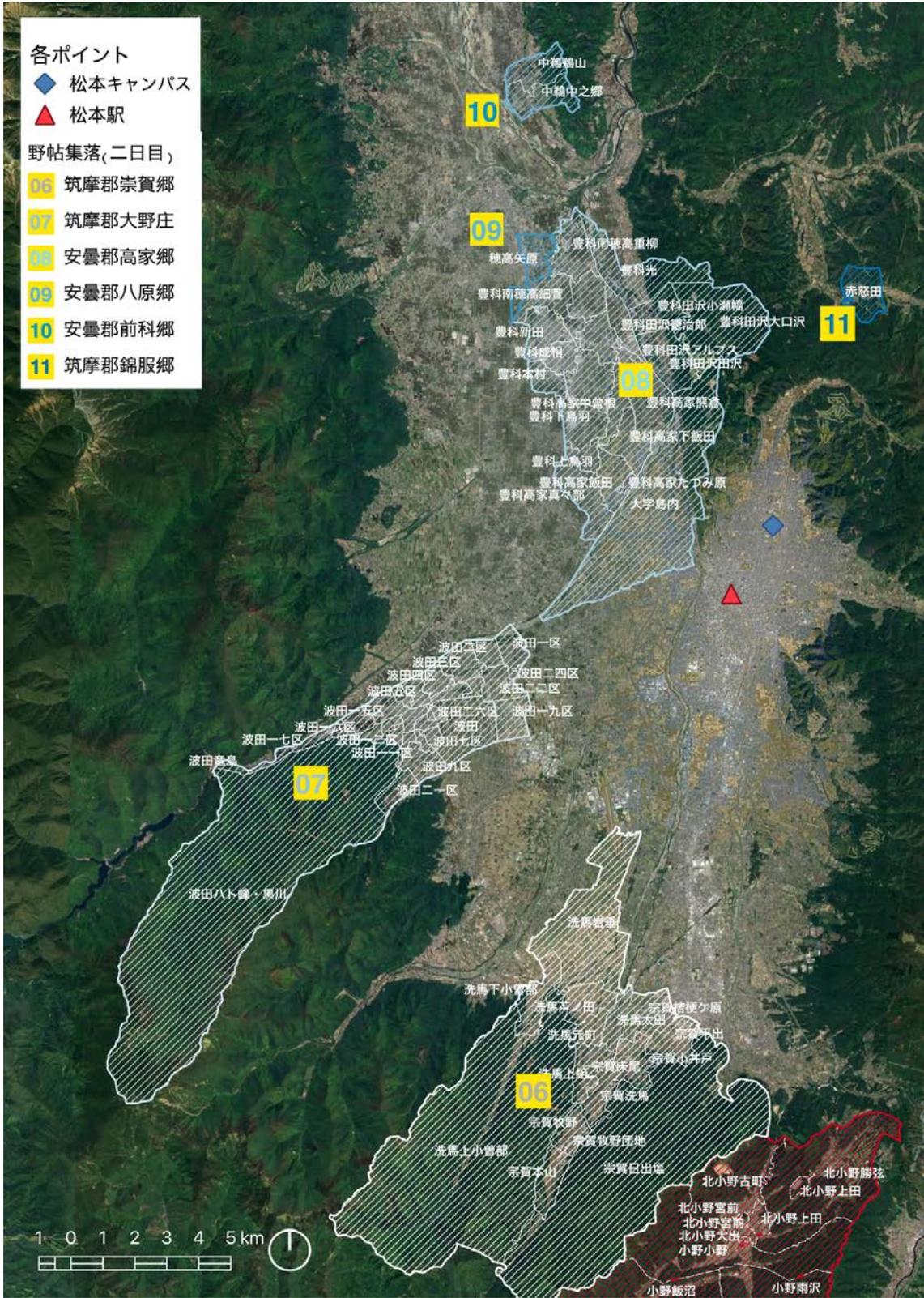


図 10 野帖番号 06-11 航空写真 (碓井颯作成)

2025 年 5 月 14 日発行

2024 年度伊那谷・松本盆地疾走調査報告書

著作・編集（五十音順）

石川初

小林千尋

金盛晋也

川井操

木下剛

中谷礼仁

土居浩

田熊隆樹

福島加津也

林憲吾

慶應義塾大学環 環境情報学部 石川初研究室

滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科 川井操研究室

信州大学 先鋭領域融合研究群 社会基盤研究所 学術研究院農学系 上原三知

千葉大学大学院 園芸学研究科 緑地環境学コース環境造園領域

都市環境デザイン学研究グループ 木下剛研究室

東京大学生産技術研究所 林憲吾研究室

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科 福島加津也研究室

早稲田大学理工学術院 創造理工学部建築学科 建築史研究室 中谷礼仁研究室

立正大学 奥村敦至

発行

千年村プロジェクト

関東地域活動拠点

早稲田大学理工学術院 創造理工学部 建築学科 中谷礼仁研究室

〒 169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1 55N-8-9

Tel. 03-5286-2496